

利
山
山
山

大槻修二著

小學日本文典

浪華 二書房藏

藏書

東京
學校

利
山
山
山

例言

我國言語ノ類別ヲ建テシハ明和中ニ京師ノ人
 富士谷成章ガ名裝挿頭結脚ノ四種ニ分タレシ
 其始トナセリかさし抄三冊此時江戸ニテ加
 茂真淵モ亦語意考あひ抄六冊著シテ言葉遣ニ初體用
 令助ノ五轉アルヲ説カレタリ其後伊勢ノ本
 居宣長其子春庭並ヒ出テ、詞玉緒冊七詞八衢冊二
 詞通路冊三等ノ諸書ヲ撰シ詳カニ言語ノ係結ト
 切續ト自他トヲ考ヘ定メラル若狹ノ僧義門更
 ニ其説ヲ擴メテ動詞ニ截斷未然已然連用連體

小
例言

明治五年三月 日
浪華 二書房藏

希求ノ六變アルヲ云ヒ出サレタリ活語指南
數部アリ以テ上ノ諸書ハ是ヨリ後ハ數十種ノ語
共ニ刻本ニテ世ニ行ルハ是ヨリ後ハ數十種ノ語
學書アルモ大率皆此數子ノ説ニ出入附演セル
ノミ

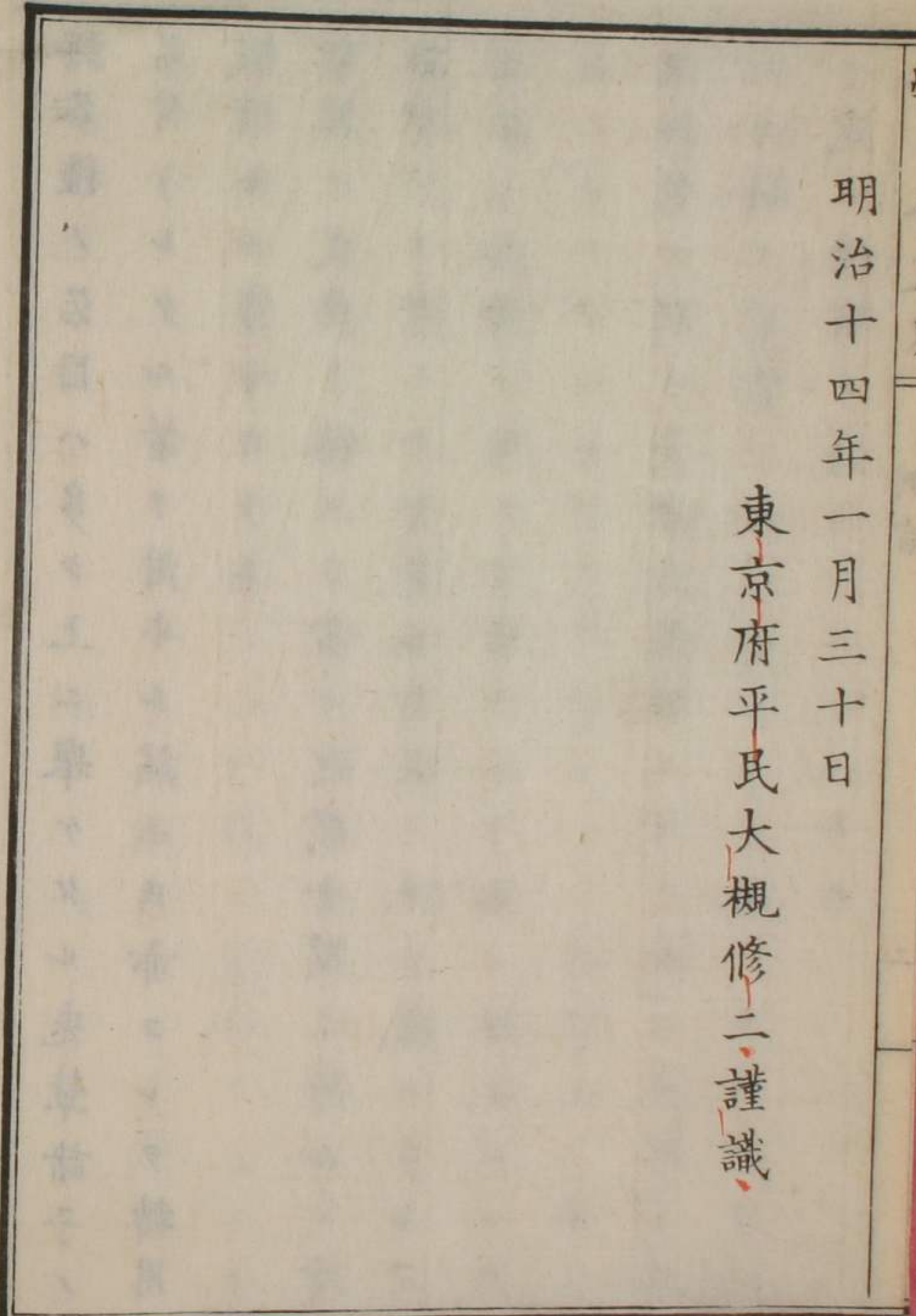
言語ノ變轉ハ素ヨリ極リナキ者ニシテ變ノ又
變ヲ舉ケ轉ノ又夕轉ヲ載セント欲セバ其數殆
際限アル可ラズ况ヤ此書ノ如キハ小學教授ノ
用ニ供ヘントスル者ナレバ殊ニ簡略ニシテ且
要アルヲ主一トス故ニ其大綱ヲ示シテ變轉ノ
細條旁徑ハ總テコレヲ漏セリ而メ書中ナル言

語各種ノ名目ハ多ク上ニ舉ケタル先輩諸子ノ
名付ラレタル者ヲ用キル然トモ亦コレヲ轉用
假借セル事少カラス

我國ノ文典ト稱スル者ハ近歲世間ニ行ル所
數書アリ然トモ著者各自家ノ説ヲ載セラル
者多シ此書ト雖モ亦素ヨリ丁巳ノ臆説タルヲ
免レガルベシ吾弟文彦嘗テヨリ諸學友ト謀リ
文法會ヲ開キテ討論講究スルヲ既ニ五年ニ及
ベリ故ニ其書ノ世ニ出ツルニ至リナバ必方ニ
一定ノ法則ヲ得ルヲアルヘキカ

明治十四年一月三十日

東京府平民大槻修二謹識



小學日本文典卷上

東京大槻修二著



文章を書き綴るふを自ら其法式ありこれを文
 法と云ふ
 故に千萬の言葉を列ね並ぶるとも其法式は因
 らされど畢竟已れの意を書き顯すおとを得
 る能えざる者なり
 文法を先つ其音聲の符徴とする所の文字を知
 り次に思ひを述ぶる所の言葉遣ひを悟りて後
 は文章の法式を説くへし

はれ、此文法は階級を建て、三の篇目も分つ

文字篇 假字と漢字との兩條

言語篇 名詞動詞裝詞并ニテニヲハの四條

文章篇 言葉の切續と自他と條結との三條

斯く次第を建て、文字言語の用ゐ方を説き而

て後初めて文章の法式を知り悟るべし

○

文字篇

我が國にて遣ひ用ゐる文字は兩種あり一を假字と云ひ一を漢字と云ふ

はて人の音聲の基を清音四十七と濁音二十と

鼻音一となり、六十八の音を重ねて言葉と

なり、其言葉を列ねて文章を作るなり

假字を六十八の音を書き記す符徴よりして

假字のみよても言葉を列ねて我が思ふ事を書

き取るよも少くも差支ゐる事なり

漢字を唐土の文字よて其字の意味の我が國の

言葉の心よ叶ひとる者を取り合せて用ゐるも

あり又其字音の儘よて直ニ遣ひ用ゐるもあり

○假字の事

學田本「文」
 假字の字樣は、平假字と、片假字との二體あり、
 清音の四十七を、いろむ歌のり、これに、平假字よ
 て、

片假字も次の五十音圖の處に合せり

いろをよふへと
 ちりぬるを、
 よ、とれそつねな
 らむうのおく
色 句 散 世 誰 有 為 常 我 奥

やま、ふこえて
 あさきゆめ
 急ひもせず
山 今日 淺 夢 見 酔

去の平假字よ、又異なる、丁體あり、

以路はにほ通
 ちりぬれ
 わがふたを
色を白へと散りぬるを

津祿那らま 我の世誰そ常ならん

宇井乃於久屋浦

けぬ大江亭 有為の奥山今日越えて

河津起由免み志

畫玉茂粉ま 浅き夢見し酔もせず

これ色葉歌の本意にて書き列ね其下に出
即其意味なりはれど斯くの如くも讀
習ひ置くべし

濁音の事

濁音を別ニ字跡を假字の肩ニ點を付けて大

れを分てり大の點を付くるを濁を打つと云ふ

故ニ同一假字なれども點の有ると無きとにて

清音濁音と云ひ分つ

上の色葉歌の字が拵むの如く次の五十音

圖の處ニ二十字を出せり

大の濁音を清音と意味の全く變る事あり

付次 沓屑 落怕

知らず 知らず 大れり 大れり の如し

又上よりの讀み續きよて濁る事あり

山の川をなまがえ 石の橋を以てばし

下る坂をえぐりばり 渡す船をわたりぬねと云ふ類なり

総べて濁音を言葉の上よあるおとあし

又半濁音と云ふ者ありはむぬほの五音よし

て又上よりの續きよ因りて濁る者なり

新版	合羽	月日	切符	隔壁	日本
邊鄙	多日	多日	多日	多日	多日
本復	多日	多日	多日	多日	多日
近邊	多日	多日	多日	多日	多日
蒲黄	多日	多日	多日	多日	多日

熟讀スベシ

熟讀スベシ

右の如くとツとの下よ在る時のみなり假字

の肩よ圈を付けて其あるしとす

又濁るゝゝゝらねども鼻音の下よ在るアイエ

オの四音をナニネノと變る者あり

恩愛を於ん那い 延引を 江んにん

因縁を以ん祢ん 観音を えん乃むの類

右も上より乃讀み續きよて變る事上の例の如

し但し鼻音より移る音をなれスくの如く變む

るなり

○鼻音の事

鼻音ハナをハぬる音ナリなり

口クチをツ結ムスびてハ鼻ハナ漏モらす故ユにハ鼻音ハナと云イふなり

○五十音の事

音を遣ツクひ用モチゐる法ハを五十音圖ゴジュウオンズとイて、
定サむべしス即ス片假字カタカナにて

アイウエオ
カキクケコ
サシスセソ

夕ツ千チツツテテトト
ナナニニヌヌネネノノ
ハハヒヒフフヘヘホホ
ママミミムムメメモモ
ヤヤイイエエオオ
ララリリルルレレロロ
ワワヰヰウウヱヱヲヲ

上の四十七字は、イウエの三字を重ね加へて五十字とし、^{タテ}豎を十行^{ヨコ}に並べ横を五段と定む。

ガギグゲゴ
ザジズゼゾ
ダヂヅデド
バビブベボ

右も二十の濁音にて清音と同じき用ゐる様なり。

上の五十音を用ゐる法は種々あれど先づ三通の名目を能く覺へ置かへし、一つを豎の行の名なり。

ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行
ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行

これにアイウエオをア行とし、カキクケコをカ行とさるなり、餘をこれに倣ふべし、
二つを段毎に横に通じ、名なり、
アカサタナハマヤラワを、
イキシチニヒミイリキを、
ア段と云ひ、
イ段と云ひ、

熟讀スベシ

ウクスツヌフムユルウを、ウ、段と云ひ
 エケセテネヘメエレエを、エ、段と云ひ
 オコソトノホモヨロヲを、オ、段と云ふ
 三つを音の出づる處の名なり、
 ア行、ヤ行、ワ行、喉音なり、喉より真直に出づる音
 カ行、サ行、齒音なり、カを真齒を障りサを前齒を當り
 タ行、ナ行、ラ行、舌音なり、舌の遣ひかたを出づる音
 ハ行、マ行、唇音なり、ハを軽く唇を動しマを重く遣ふ
 六の喉、齒、舌、唇の四音を自然の定りなれど、
 タ行のチツを必舌を遣ひハ行も総べて唇

を動し用ゐらば一

○母音の事

母音とて聲の親みてアイウエオの五音を云ふ
 六の外ホカの諸音シヨイムも皆六の五音の韻あり

カを引ヒをえ、アとなり、シを引ヒをえ、イとなり、
 フを引ヒをえ、ウとなり、メを引ヒをえ、エとなり、

口を引ヒをえ、オとなり、

おれりてアイウエオを諸音の親たる事を知ら
 べし、

○喉音の事

喉音をア、ワ、ヤ、の三行に分るれども其本をイと
ウとの兩音を又ア、イ、ウ、エ、オの重り合ひとる者
をり

熟讀スベシ

イの音の下はア、イ、ウ、エ、オを重ねて呼ぶぞ
ヤ、イ、ユ、エ、ヨとたり

ウの音はア、イ、ウ、エ、オを重ぬる時を
ワ、ウ、エ、ヲとたり
右の如き根元なれど、
と呼びて、イ、エ、オと同じし、
ぬ、様、云、ひ、分、く、べ
し

熟讀スベシ

但、イ、ウ、エの三音をア行の音と同じ様よ心得
居るも、
て、字、形、を、異、よ、せ、ば、

○ 拗音の事
拗音とも二音相重り合ひとる者を云ふ上の如
く、
も、
ヤ、ユ、ヨの三音の一段、
の、
り、

キヤ	シヤ	チヤ	ニヤ	ヒヤ	ミヤ	リヤ
キユ	シユ	チユ	ニユ	ヒユ	ミユ	リユ
キヨ	シヨ	チヨ	ニヨ	ヒヨ	ミヨ	リヨ

右の拗音イム又對タイして上の六十八音を直音チヨウオンと云ふ

○變音の事

音オンの變カハるム六ムツの差別シヤビあり

○轉音テンオンとオム同ドウトオナ行コウよオムてオム轉ウツるオム者モノをオム云オムふ

工コウ段ダンのオムアオム段ダン又オム轉ウツるオムをオム定サダりオムとオムす

轉テン音オンとオム通ツウ音オン約ヤク音オン畧リョウ音オン延エン音オン訛シ音オン

竹林チキリをオムタカハヤシ 風上カゼカミをオムカザカミ

手網テツをオムタヅナ 船場フネバをオムフナバ

苗代ナエシロをオムナハシロ 爪先ツメサキをオムツマサキ

冷水ヒエをオムヒヤミツ 群鶴ムラツルをオムムラツル

聲高コエダカをオムコワダカ

右ミダのオム如ニホくオム言葉コトバのオム二フタつオム重カチりオムたオムるオム時トキ又オム其ソノ音オンをオム轉ウツ

せオムどもオム何ナニれオムのオム言葉コトバもオム悉コトクくオム變カハるオム者モノ又オム何ナニれオムのオム言葉コトバもオム悉コトクくオム變カハるオム者モノ又オム何ナニれオムのオム言葉コトバもオム悉コトクくオム變カハるオム者モノ

又オム此コノ外ホウもオム種シユ々オムのオム轉ウツ音オンあり

炎ホノをオム火ヒのオム穗ホなり 螢ホタルをオム火ヒ垂タルなり

黄金オウゴンをオムコガネとオム云オムふ 木陰キカゲをオムコカゲとオム云オムふ

白玉を シラタマ 萌黄を モヨギ

馬手を メテと呼ぶの類なり

○通音とも同段にて互に通ひ變る者を云ふ

マ行のハ行濁音も通ふを常とす

苦を トバ 黍を キビ

撰を エラブ 皇を スベラキ

紐を ヒボ 乏を トボシ

此外も

梅馬のムメムマ 春雨小雨のサメ

走をワシルの類あり

○約音とも言葉の中なる音を詰めて短ふ呼

ふ者を云ふ

去の約むるも二様あり

一つは母音の約りなり

サアリをサリと約むるをサの韻もア音のまむなり

這参のりを入の約なりヒもキもイの韻のまむなり

二つは二音の合ひて一音も約まるなり

捧をサシアゲ 擡をモチアゲなり

シアをサとたり チアをタとたり

此方彼方をコノカタアノカタなり

共ニノアの約ミタとなるなり

○畧音とも言葉の中なる音を省き去りても同

いき意味なるなり

文字をモジ

東をヒカシ

未をマダ

宣シマフをノタマフ

春柳青柳のヤギの類なり

○延音とも言葉の中なる音を延べて同一意味

なる者を云ふ

冠をカウムリ

而シテをシカウシテ

設をマウケ

鼻負をヒイキ

四時をシイジ

詩歌をシイカの類なり

○訛音とも聲の云ひ訛りなり

一つはえいとウとの母音の韻のみよなる者

なり

開キテをヒライテ

久シキをヒサシイ

無シ無キをナイ

啄ムをツイバム

双をヤイバ

松明をタイマツ

能クをヨウ

疾クをトウ

大キクをオホキウ

斯クをカウの類なり

二つはえツと詰まるとンと跳ぬると又ウと

訛ナまるとなり

知シリテをシツテ 立タチテをタツテ

向カヒタリをムカツタリ

住スミテをスンデ 死シニタルをシンダル

懇ネをネンゴロ 殆ホトをホトンド

索ソク籥ガウを吹フク革カハなり 笄カギを髮カミ搔カキなり

商アキ人ビトをアキウド又アキンドと云ふ類

三つよを音を直ナム詰ツめると又鼻ヒ音オムを加クへ

とるとの訛ナなり 全マツクをマツタク 真マ直スグをマツスグ

專モハラをモツハラ 尤モトモをモツトモ

牙キバをキンバ 鳶トビをトンビ

真マ中ナカをマンナカの類

○漢字の事

漢カン字ジを唐モロ土コシの文モン字ジを常ツネニカラモジと呼ヨぶ者モノ

よしておれを讀ヨむ音オムと訓シとの差シヤ別ベツあり

音オムとも其ソノ字ジの聲コエよして即ツチち唐タウ土トの言コト葉ハなり

れは漢カン音オム吳ゴ音オムの兩リョウ様ヤウあり又其ソノ字ジよ就ツクきて其ソノ用モチ

ぬる意味イミを字ジ義ギと云ふ 訓シとも我ワが國クニの言コト葉ハの心ココロと其ソノ字ジ義ギと相ア合アふ者モノ

とを取りて直^{ダイナ}其^{ソノ}言葉^{コトバ}の文字^{モジ}とす常^{ツネ}ヨミと云^{イハ}ふ

漢^{カン}音^{オン}を唐^{タウ}土^ト北^{ホク}方^{ハク}の音^{オン}なり吳^ゴ音^{オン}を南^{ナン}方^{ハク}の音^{オン}なり其^{ソノ}字^ジ義^ギを變^カる^ハ事^{コト}を然^{シカ}れども中^{ナカ}に字^ジ義^ギの異^{コト}なる^ハ為^タる^ニ一^{イチ}字^ジに兩^{リョウ}音^{オン}を云^イひ分^ワくる^{コト}事^{コト}あり

○音の事

音^{オン}は開^{カイ}音^{オン}合^{ガフ}音^{オン}あり又^{マタ}直^{チキ}音^{オン}拗^{アウ}音^{オン}あり開^{カイ}音^{オン}を口^{クチ}を開^{ヒラ}きて呼^ヨぶ聲^{コエ}にして合^{ガフ}音^{オン}を口^{クチ}を合^アせて呼^ヨぶ者^{モノ}なり清^{セイ}音^{オン}濁^{ダク}音^{オン}共^{トモ}に同^{ドウ}じ

開^{カイ}音^{オン}をア、段^{ダン}イ、段^{ダン}エ、段^{ダン}より出^イづる音^{オン}を云^{イハ}ふ但^{タテ}行^{コウ}を

合^{ガフ}音^{オン}をウ、段^{ダン}オ、段^{ダン}及び^キ口^{クチ}行^{コウ}より生^{シキ}むる者^{モノ}を云^{イハ}ふ

孝^{カウ}と章^{シヤウ}とを開^{カイ}音^{オン}にして公^{コウ}と松^{シヨウ}とハ合^{ガフ}音^{オン}なり

直^{チキ}音^{オン}を口^{クチ}に素^ス直^{ナホ}なる聲^{コエ}なり拗^{アウ}音^{オン}とを素^ス直^{ナホ}ならぬ音^{オン}なり亦^{マタ}兩^{リョウ}音^{オン}共^{トモ}に清^{セイ}濁^{ダク}あり

加^カ佐^サを直^{チキ}音^{オン}にして果^{クワ}沙^{シャ}を拗^{アウ}音^{オン}なり

○韻の事
韻^{イン}をヒツキと讀^ヨみ諸^{シヨ}音^{オン}の下^{シタ}に付^ツきて其^{ソノ}韻^{イン}を添^{ソフ}ふる者^{モノ}なり古^コれは長^{チヤウ}聲^{セイ}短^{タン}聲^{セイ}の差^{シヤ}別^{ベツ}あり

長聲とて延びたる韻を云ふ
ワイヤンムの五韻なり
短聲とて詰りたる者を云ふ
フツクチキの五韻なり

應愛類新金
直音の長聲なり

長中綾觀回
直音の長聲なり

邑札角吉石
直音の短聲なり

百宿直郭活
直音の短聲なり

右の諸音を次々各音の漢字を一字づゝ出して

○音便の事

其大略を示せり
音便とて讀み續きよ因りて自ら字音の其本音

を變ずる者を云ふ決して一字づゝ離して讀む時よ出づる者ららば

即ち上の濁音の下よ舉げたる三例おれなり

○各音の漢字

漢字の音を直音拗音よ長短の兩韻を添ふれ

一千零二十音となるおれよ直拗の單音を加ふ

れハ惣計一千一百二十二音なり然れとも缺く

る者あり韻を受たる者あり即ち各音の區別

を建て漢字を列ぬる事左の如し

單音とて長短の諸韻を添へざる者を云ふ

字傍に付くる者も片假字ヲ漢音ト一平假
 字を呉音トす又字の下にゆる假字を訓を
 二義ある者も共に出す訓を欠く者も字
 音もて熟語を擧ぐ
 五十音圖に依りて各音を列ぬ一段全くと無
 き者もこれを省き一段の中より欠くる者
 あれども□を設けて文字を缺くと
 漢字も通俗の文字を擧ぐ然れども音も就
 きて字を求むる者なれども見慣れぬ文字を
 出すも止む事を得ざるなり又各音を列ぬ

〇直音の單音
 る為に一字を數處に出すことあり

多 <small>タ</small> おほく	左 <small>サ</small> ひだり	加 <small>カ</small> くま	阿 <small>ア</small> とま
知 <small>チ</small> しる	志 <small>シ</small> こころざし	期 <small>キ</small> かぎり	以 <small>イ</small> もつて
都 <small>ツ</small> みやこ	素 <small>ソ</small> 素袍	九 <small>ク</small> このつ	宇 <small>ウ</small> なり
□ <small>テ</small> セイ	世 <small>セ</small> よ	家 <small>ケ</small> いえ	衣 <small>エ</small> えぬぎ
土 <small>ツ</small> つち	祖 <small>ソ</small> おや	古 <small>コ</small> ふる	於 <small>オ</small> おいて

學
日
本
大
典
卷
之
四

那 ナ

二 ニ

奴 ヌ

禰 ネ

□

波 ハ

比 ヒ

不 フ

□

保 ホ

麻 マ

味 ミ

無 ム

馬 マ

茂 モ

也 ヤ

異 イ

由 ユ

依 イ

與 ヨ

羅 ラ

里 リ

流 リウ

□

路 ロ

和 ワ

爲 ヰ

雨 ウ

會 ヱ

汗 ア

雅 ガ

義 ギ

愚 グ

下 ゲ

五 ゴ

坐 ザ

自 ジ

數 ズ

是 ゼ

□

馱 ダ

治 ヂ

圖 ズ

□

度 ド

婆 バ

美 ビ

武 ブ

□

暮 ボ

小
日
本
文
典
卷
之
二

十
七

以上七十音同音の者三音と欠音七つとを除く六十六音
○拗音の單音

<input type="checkbox"/> ヲ	<input type="checkbox"/> キ	<input type="checkbox"/> シ	脚 <small>キヤ</small> 脚絆
<input type="checkbox"/> ギ	朱 <small>シユ</small> しゆ	<input type="checkbox"/> ギ	沙 <small>シヤ</small> す
樹 <small>ジュ</small> き	注 <small>チュ</small> しゆ	蛇 <small>ジャ</small> へび	茶 <small>チャ</small> 煎茶 抹茶
住 <small>ヂ</small> きむ	<input type="checkbox"/> ニ	<input type="checkbox"/> ナ	若 <small>ニヤ</small> わか
<input type="checkbox"/> ビ	<input type="checkbox"/> ヒ	<input type="checkbox"/> ビ	<input type="checkbox"/> ヒ
	<input type="checkbox"/> ミ		<input type="checkbox"/> ミ

居キヨ
をる

書シヨ
かく

著チヨ
あらわ

女ニョ
をんな

ヒ

ミ

旅リヨ
たび

魚ギヨ
うを

助ジュ
たすく

除ヂヨ
のぞく

ビ

過クワ
とく

卧グワ
ふ

以上三十五音、缺くる者十七音を除くも十九音なり
六の直拗の單音合せて一百零二音なり、たれも字音
の基をれも文字の有無に係らば、擧ぐれども以下ハ
其欠くる者も大率省きて載せ

學
田
力
文
身
卷
之
川

○直音の長聲

ウ韻の文字

櫻 アウ
はる

有 イウ
あり

□ ウ

要 エウ
かなめ

鷗 オウ
かもめ

教 カウ
をく

久 キウ
ひさし

空 クウ
むら

橋 ケウ
け

功 コウ
いさめ

號 ガウ
よ

牛 ギウ
う

寓 ガウ
寓居

曉 ゲウ
あつめ

降 カウ
くだる

草 サウ
くさ

洲 シウ
ま

趨 スウ
もど

召 セウ
めす

層 ソウ
かさ

象 ザウ
きさ

獸 ジウ
けもの

□ ズウ

擾 ゼウ
ごころ

增 ゾウ
ます

桃 タウ
も

籌 チウ
籌策

通 ツウ
とほる

朝 テウ
あそ

東 トウ
ひが

堂 ダウ
殿堂

柔 ジウ
なやま

□ ジウ

條 デウ
きぢ

同 ドウ
おな

腦 ノウ
なづき

乳 ニウ
ち

□ ヌウ

尿 ネウ
せむり

農 ノウ
農氏

方 ハウ
かた

彪 ヒウ
とら

風 フウ
うせ

表 ヘウ
おもて

朋 ホウ
とも

小
大
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

學由本典卷之十一

王 ワウ おほきみ	老 ラウ おい	陽 ヤウ 隆陽	毛 マウ ケ	暴 バウ あらし
<input type="checkbox"/> キウ	柳 リウ やなぎ	右 イウ ミダ	<input type="checkbox"/> ミウ	繆 ビウ ミウ
<input type="checkbox"/> ウウ	<input type="checkbox"/> ルウ	勇 ユウ いそひ	<input type="checkbox"/> ムウ	<input type="checkbox"/> ブウ
<input type="checkbox"/> エウ	料 レウ 代料 料理	幼 ユウ こども	妙 ノウ たへ	苗 ベウ タ
翁 ラウ おきな	樓 ロウ たうろう	用 ユウ もち	蒙 モウ かうも	丰 ホウ あま

以上ウ韻十四行は互りて皆あり但十一字を欠く

イ韻の文字

買 バイ かひ	大 ダイ おほき	西 サイ にし	愛 アイ めづ
米 バイ こめ	泥 ダイ どろ	清 セイ きよ	榮 エイ さかえ
每 マイ ま	内 ナイ うち	在 ザイ 在り 在所	開 カイ ひらく
名 マイ な	寧 ネイ やすし	稅 ゼイ 組稅	計 ケイ けい
來 ライ きこ	拜 ハイ をがむ	帶 タイ おび	害 ガイ わざはひ
禮 レイ れい 礼儀	并 ハイ なら	帝 テイ みかど	藝 ゲイ ぎ 技藝

小日本文典卷之十一

學
田
本
文
典
卷
之
四

隈 ワイ
とま
衛 エイ
まもろ

以上イ韻もウイオの三段及びハヤ行を受ケズ

斗韻の文字

推 スイ
おま
隨 ズイ
ままご
追 ツイ
おふ
類 ルイ
たぐひ
遺 ユイ
つひ
苟 クイ
苗香

以上斗韻ノウ段を受ケル定ヲなれどもスツルエウ
の五音のミ其中ニモエ斗も遺言遺物又由緒唯一
唯摩等の音韻ある乃みうてウ斗も苗香乃みたり
又貴歸の文字ニク斗の音韻アリ通俗ナクねバ記

さば

ン韻の文字

山 <small>サン</small> やま	雁 <small>ガン</small> かり	寒 <small>カン</small> さむ	安 <small>アン</small> やすし
神 <small>シン</small> かみ	銀 <small>ギン</small> あまぐね	近 <small>キン</small> ちか	因 <small>イン</small> よも
寸 <small>スン</small> すん	軍 <small>グン</small> いぐさ	君 <small>クン</small> きみ	運 <small>ウン</small> 天運
千 <small>セン</small> ち	限 <small>ゲン</small> かぎり	權 <small>ケン</small> 民權 権官	縁 <small>エン</small> よろ
村 <small>ソン</small> むら	言 <small>ゲン</small> ごん	昏 <small>コン</small> とれ	恩 <small>オン</small> 國恩

小
目
本
文
典
卷
之
四

廿一

學
日
文
身
三
卷
之
上

殘 ザン のこり
仁 ジン 仁徳
善 ゼン よ
存 ゾン 存生

端 タン はし
陳 チン ちん
天 テン てん
豚 トン ぶた

段 ダン だん
塵 ヂン ちん
殿 デン てん
鈍 ドン どん

難 ナン なん
人 ニン ひと
年 ネン ねん
本 ホン もと

半 ハン はん
貧 ヒン ひん
粉 フン こな
邊 ヘン へん

番 バン ばん 當番
憫 ピン ひん
分 フン ぶん
勉 ベン べん
盆 ボン ぼん 茶盆

万 マン まん
民 ミン みん
面 メン めん
門 モン もん

亂 ラン らん
隣 リン りん
連 レン れん
論 ロン ろん 論判

灣 ワン わん 港灣
負 フン ふん 負數
雲 ウン うん
遠 エン えん
溫 ウン うん あたたか

以上ノ韻を諸行皆らまとも但ヤ行を受々す且ウ
段多ク欠ク

學
 文
 韻
 之
 上

六のン韻も舌内聲と云ひ其本音も又韻なり故に舌
 牙て止むる者なれど此名あり今も鼻音に移して呼
 ひ出せむン韻に定めつ

ム韻の文字

諳 アム
 飲 イム
 塩 エム
 音 オム

甘 カム
 金 キム
 兼 ケム
 今 キム

岩 ガム
 吟 ギム
 減 ゲム
 嚴 ガム

三 サム
 心 シム
 潜 セム
 そむ

暫 ザム
 甚 ジム
 漸 ゼム
 ぞむ

淡 タム
 賃 チム
 點 テム
 貧 トム

談 ダム
 尋 ヂム
 テム
 曇 ドム

南 ナム
 任 ニム
 念 ネム
 ノム

小日本文典 長之七

學
 凡
 品
 泛
 犯

凡 ハム
 品 ヒム
 泛 ヘム
 犯 ボム

藍 ラム
 林 リム
 廣 レム

以上ム韻をヤ行ワ行并ヨウ段な一才段を受とる者
 も皆吳音なりハ行の濁音をボムの一音乃ミ故ニ清濁
 を同行ニ列ぬ

マ行をマムミムの文字にまとも通俗をくねを省き
 つ
 大のム韻も唇内聲と云ふ唇を結びて出を音なり

拗音の長聲

ウ韻の文字

京 キヤウ
 將 シヤウ
 長 チャウ
 評 ヒヤウ
 明 ミヤウ
 良 リヤウ

行 ギヤウ
 上 シヤウ
 丈 ヂヤウ
 病 ビヤウ

宮 キユウ
 終 シユウ
 中 チュウ
 病 ヘイ
 隆 リュウ

充 ジユウ
 重 ヂユウ
 病 ビユウ

小
 目
 大
 文
 由
 卷
 之
 七

學
印
文
身
老
之
山

共 ^{キヨウ} _{とも}
勝 ^{シヨウ} _{うつ}
懲 ^{チヨウ} _{こらし}
氷 ^{ヒヨウ} _{こわり}
陵 ^{リヨウ} _{おろ}
_{みさ}

凝 ^{ギヤウ} _{こも}
乘 ^{ジヨウ} _{のり}
濃 ^{ヂヨウ} _{こし}
 ^{ビヨウ}

光 ^{クワウ} _{ひより}

以上ウ韻をニヤウニユウニヨウの三音を

イ韻ン韻の文字

回 ^{クワイ} _{めぐり}
外 ^{クワイ} _{そと}
観 ^{クワン} _{みる}
願 ^{ガン} _{ねがふ}

以上イ韻ン韻をクワウより受くる乃と
総へて拗音をキムの兩韻を受て

○直音の短聲

フ韻の文字

鴨 ^{アフ} _{かも}
邑 ^{イフ} _{むら}
葉 ^{エフ} _は
悒 ^{オフ} _{おふ}
_{憂心なり}

甲 ^{カフ} _{あし}
急 ^{キフ} _{いそ}
協 ^{ケフ} _{かちふ}
怯 ^{ケフ} _{おそ}

蛤 ^{ガフ} _{たまご}
及 ^{ギフ} _{及第}
業 ^{ゲフ} _{学業}
劫 ^{ケフ} _{おびや}

小
大
二
三
四
五

學
印
本
文
典
卷
之
上

挿 ^{サフ} _{はさむ}
習 ^{シフ} _{なまふ}
涉 ^{セフ} _{しる}
雜 ^{ザフ} _{雑人}
十 ^{ジフ} _{とと}

答 ^{タフ} _{こたふ}
螫 ^{チフ} _{螫居}
蝶 ^{テフ} _{胡蝶}
納 ^{トフ} _{出納}
帖 ^{テフ} _{書帖}

納 ^{ナフ} _{をまむ}
入 ^{ニフ} _い
捻 ^{ネフ} _{ひねる}
衲 ^{ナフ} _{僧衣}
乏 ^{ハフ} _{とと}

法 ^{ハフ} _り
立 ^{リフ} _{たつ}
獵 ^{レフ} _{かり}
拉 ^{ラフ} _ひ
乏 ^{ハフ} _{とと}

蠟 ^{ラフ} _{蠟燭}
立 ^{リフ} _{たつ}
獵 ^{レフ} _{かり}
拉 ^{ラフ} _ひ

以上フ韻をウ、段及ビヤ行ワ行を受ケザハ行をハフ
の音のり乃ミオ、段を受ケル者も皆異音をナリ
濁音をカ行の外も諸行甚と少し故ニ清音の下ニ擧ガ
ツ韻の文字

厩 ^{アツ} _{かい}
逸 ^{イツ} _{秀逸 隠逸}
鬱 ^{ウツ} _{鬱陶 繁鬱}
悦 ^{エツ} _{よろこぶ}
乙 ^{オツ} _{甲乙}

葛 ^{カツ} _{くわ}
結 ^{キツ} _{むすぶ}
屈 ^{クツ} _{かむ}
缺 ^{ケツ} _か
骨 ^{コツ} _{ほね}

合 ^{ガツ} _{合掌}
駝 ^{ギツ} _{駝鳴}
月 ^{ゲツ} _{つき}
元 ^{ゴツ} _{突元}

小
日
大
乙
自
卷
之
二
廿六

學
日本
文庫
卷之五

察 サツ
推察
檢察

失 シツ
しきふ

スツ

節 セツ
とぎ

卒 ソツ
卒去
士卒

雜 ザツ
まじり

實 ジツ
みつ

ズツ

舌 ゼツ
き

ゾツ

達 タツ
通達
達者

帙 チツ
書帙

ツツ

鍊 テツ
くわね

突 トツ
つ

脫 ダツ
ぬく

昵 ダツ
きむ

ヅ

捏 デツ
はね

訥 トツ
訥辯

納 ナツ
納得

日 ニツ
日本

熱 ネツ
あつし

髮 ハツ
かみりけ

筆 ヒツ
ふで

沸 フツ
こく

擎 ヘツ
う

發 ハツ
發起
發足

伐 バナ
う

ビツ

佛 ブツ
ほとけ

別 ベツ
こく

沒 ボツ
沈没
没入

末 マツ
まへ

密 ミツ
細密
秘密

ムツ

滅 メツ
寂滅
滅亡

物 モツ
もの

辮 ラツ
辛辮
辮並

律 リツ
律呂
法律

ルツ

列 レツ
つね

ロツ

幹 ワツ
幹旋

聿 チツ
聿迹

蔚 ウツ
蔚ノ字
ト通ス

曰 エツ
いへく

越 エツ
越年

小
日
文
庫
卷
之
五

廿七

以上ツ韻をヤ行のみを受々ず且ウ段甚と少し

ク韻の文字

惡アク

育イク

億オク

角カク

菊キク

谷コク

學ガク

獄ゴク

昨サシ

肅シク

速ソク

石ガク

塾ジク

族ゾク

宅タク

逐チク

讀トク

濁ダク

軸ヂク

獨ドク

諾ナク

肉ニク

釋ノク

阿釋佛語なり

薄ハク

福フク

北ホク

瀑バク

服フク

僕ボク

幕マク

木モク

藥ヤク

鬻イク

欲ヨク

樂ラク

陸リク

六ロク

或ワク

屋ヤク

小月大月

廿八

以上ク韻もウ段工段を受たざれどもハ行乃もヒクなしてフクフク

キ韻の文字

渴 カチ 消渴

月 ガチ 正月

達 タチ 友達 公達

八 ハチ ヤフ

撥 バチ 太鼓の撥 象牙の撥

埒 ラチ 不埒

一 イチ 一人

吉 キチ 吉日

質 シチ 質物

日 ニチ 日限

筆 ヒチ 筆 筆 筆

律 リチ 律義

血 ケチ 血縁

節 セチ 節會

別 ベチ 別義

越 ヲチ 越度

越 エチ 越前

以上キ韻も皆ツの轉音なり

キ韻の文字

式 アキ 礼式

食 オキ 食

直 アキ 直

足 ヒキ 一足

力 リキ 力

域 オキ 區域

益 エキ シヨク 益

激 ゲキ シヨク 激流 奮激

夕 セキ チヨク 夕

敵 テキ ヒツ 敵對

溺 デキ リヨク 溺

癖 ヘキ キク 癖

覓 ベキ 覓

歷 レキ 經歷 履歷

以上キ韻もイ段工段乃ミを受く但イ段も皆異音

て工段も漢音なり

○拗音の短聲

ク韻の文字

學正不文此
 卷之五

却 キヤク ちやくそく
 尺 セキ ちやく 寸尺
 嫡 チヤク ちやく 嫡子
 若 ニヤク ちやく 老若
 百 ヒヤク ひやく 百
 脈 ミヤク ひやく 山脈 脈絡

畧 リヤク はやく
 逆 ギャク まやく さいふ
 弱 ジュヤク じやく よわし
 着 チヤク ちやく 執着 貪着
 白 ハク ひやく しろ

麴 キョク かじ
 宿 シュク やど
 蓄 チヨク たくふ
 陸 リョク ちやく 大陸 海陸
 熟 ジュク じやく じゆ
 竺 チヨク ちやく 天竺

曲 キョク まる
 職 シヨク ちやく 職業
 敕 チヨク みことり
 □ ニヨク
 逼 ヒヨク せまる
 □ ミヨク

緑 リョク みどり
 玉 ギョク たま
 辱 ジュク ちやく ちやく
 匿 ガク かづる
 □

郭 クワク くら

以上ク韻をニヒユミユニヨミヨの五音を受くることなし

ツ韻の文字

出 シュツ いづ
 黜 チユツ ちやく
 術 ジュツ じやく 學術
 怵 チユツ ちやく
 活 クワツ かく
 月 ガツ がつ

以上ツ韻をシユ、チユ、クワの三音を受くる事なし
 総て拗音をフチキの三韻を受くる事なし

言語篇

○言語四種の事

言語とも即ち言葉なり又語の字も詞の字も共
 コトバと讀むなり
 言葉も我が心と思ふまゝを云ひ述べて其意を
 通さる者なり
 言葉を一音より五音までを定數とを又二言の
 重なりて一語となる者も六音七音もあるなり
 言葉の數を數十萬のれど其部類を分とれを四
 種なり

小日本文典卷之

學問の類之止

名詞

総べての物事の名目にて其物も就き

動詞

其事を取りておれを呼ぶ名なり

装詞

物事の仕技と有様とを示す者として

テニヲハ

其言葉の末の動き變る者を云ふ
名詞動詞は付き添ひて其物其事の形
と様とを装ひ現す者を云ふ
総べての言葉を受けて其言葉の居場
處と持前と向きとを定むる者なり
のテニヲハは當つる漢字をれど假
辭の字を去の文字と定む故は篇中

○名詞の事

に在る辭の字もテニヲハと讀むべし

名詞は物名、事名、指名、數名、代名、の五種あり

物名は天文、地理、人獸、鳥魚、虫介、艸木、金石より家

屋、器具、衣服、飲食等の諸品の名なり

事名も定りたる物を呼ぶよらに其事柄も就

きて其事の名目となる者なり又動詞の仕

技と有様とを其儘は名目とせむ者なり

指名も其物其事を指す名目よりしてアレカレ、ソ

レ、コレの類をれもアカソコとも云ふ

小目入る頁

數名も一十百千萬の負數の名なり又尺の名目

柘目、秤目の量方の名なり

代名も上の四の名を代りて其名代を勤むる者

○物名の事

人の目に見ゆる物と數限りも無き程數多かれ

どおれを分るる時も天造人造の兩種なり

天造物の名

但し字音にて用みる者も片假字を付け

言葉も平假字とす以下皆をこれと同を

し

日 月 星 雲 雨 雪

風 霜 露 虹 以上天文

海 陸 山 川 湖 港

島 崎 原 野 以上地理

手 足 頭 胴 父 子

學由本之類之

兄ウイ

弟ウイ

姉ウイ

妹ウイ

以上も人休人倫

馬ウマ

犬イヌ

雞ニトリ

鴉カラス

鯛タイ

鯉コイ

蛙カエル

蛇ヘビ

蜂ハチ

蛇カマエビ

以上動物

松マツ

杉スギ

檜ヒノキ

檜ヒノキ

梅ウメ

櫻サクラ

以上植物

竹タケ

菊キク

稻イネ

麻アサ

金キン
あかね

銀ギン
あかね

銅ドウ
あかね

鐵テツ
あかね

錫スズ

鉛チン

土ツチ

砂スナ

石イシ

塩シホ

以上礦物

人造物の名

以上八種も皆天然自然に生きたる者なり天造物と云ふ

家イヘ

樓ロウ

堂ドウ

門モン

戸ト

軒ケン

窓マド

壁カベ

柱ムナ

礎イソ

以上家屋

學
日
本
文
典
卷
之
上

衣あつち 帶おび 帽ぼう 袴はかま 筆ふで 墨すみ

鍋なべ 釜かま 針はり 鋏はさみ 以上衣服器財

飯いひ 汁じゆ 酒さけ 茶ちや 飴あめ 肴さかな

肉にく 菓くわい 麵めん 乳ちゆう 以上飲食

○事名の事
以上諸物も人の手てにて作り出いせし物モノなり故ゆに入い造物ジヤウブツといふ

人のまゝあとも様々さまざまあり先まづ其場バ處チヨを云いふ事コトと仕シ技ギを云いふことと有アリ様サマを云いふと三種ミツルあり

上かみ 下しも 前まへ 後うしろ 左ひだり 右みぎ

中ちゆう 間あひ 内うち 外そと 以上も其場バ處チヨを云いふ者

勝かち 負まぢ 起おこ 居ゐ 考かん 定さだめ

悦よろこび 悔くい 耻ちがひ 譽ほまれ 以上も其仕シ技ギを云いふ
動詞の用言なり

是 コレ

此 コノ

此處 ココ

此方 コノカタ

我居る處を指は

夫 ソレ

其 ソノ

其處 ソノ

其方 ソノカタ

我ニ對ひ在る處を指ま

彼 カレ

彼 カノ

彼處 カシコ

彼方 カナタ

上の彼ニ同し但し處と事と物とを指は

何 ドレ

何 ドノ

何處 ドコ

何方 ドノカタ

疑ひて指ま名をりドレハ俗語

以上を共ニ物事と場處とを指ま

何 イツ

イツモ

幾 イツク

イツク
イツク
イツク

時と數と又物事を疑ひて指し問ふ者

○數名の事

一 ヒトツ

二 フタツ

三 ミツ

四 ヨツ

五 イツ

六 ムツ

七 ナナツ

八 ヤツ

九 コンノツ

十 トウ

百 モウ

千 チ

萬 マン

億 オウ

以上數字も又裝詞となす者あり其處を記せり

○代名の事

代名トハ總ての名ニ代りて直ニ其物事の名代となす者を云ふ

學
日
本
文
典
卷
之
上

者事所時

この四の言葉も其指す物も代りて物事又時場處の名とならる者なり

○動詞の事

動詞も言葉の末の動く時より従ひて云ひ切らる言葉とならると他の言葉の續々とこの働きあり

作用言 略して用言と云ふ

形状言 略して形言とも云ふ

脚結言 略して脚言とも云ふ

右の三種の言葉も其用ある所の意味も異なれども言葉の末の動き變る様も同じなれども總べて動詞と云ふ

○作用言の事

作用言も物事の働きと仕技とを現す者よりて立つ行く問ふ重ぬ等の言葉なり
用言は正語と俗語との兩種あり正語とも言葉

小
日
本
文
典
卷
之
上

の基^キて正^タしき者^{モノ}なり 俗語^{ゾクゴ}とも世間^{セケン}一体^{イツタイ}用^{モチ}
 める通^{ツウ}俗^{ゾク}の言葉^{コトバ}なり
 あの用^{ヨウ}言^{ゴン}の働^{ハたら}き動^{ウご}とも第一^{ダイイチ}轉^{テン}より第八^{ダイハツ}轉^{テン}ある
 たり次^{ツギ}は其^{ソノ}例^{レイ}を舉^アぐ
 又^{マタ}この用^{ヨウ}言^{ゴン}を時^シ刻^{コク}を云^イひ現^アる事^{コト}あり時^シ刻^{コク}
 とも未^ミだ來^キぬ先^{サキ}を未^ミ來^{ライ}と云^イひ今^{イマ}眼^メの前^{マエ}なる事^{コト}
 を現^ア在^{ザイ}と云^イひ既^{スデ}は過^スぎ去^サりし後^{ノチ}なる事^{コト}を過^ス去^コ
 と云^イふ言^{コト}の處^{トコロ}は時^シ刻^{コク}の事^{コト}も脚^{キョク}
 又^{マタ}言葉^{コトバ}は自^ジ使^シと云^イふ事^{コト}あり假^カ令^{レイ}へを歸^カル分^{ブン}ル
 も自然^{シゼン}の働^{ハたら}きよして返^カス分^{ブン}クを他^タより使^シひ働^{ハたら}

あまら者^{モノ}なり 自^ジ使^シめこととを文章^{ブツ}篇^{ペン}に記^キす
 用^{ヨウ}言^{ゴン}の差別^{サベツ}
 正^{セイ}語^ゴは四^ヨ段^{ダン}と二^ニ段^{ダン}と一^{イチ}言^{ゴン}との三^{サム}種^{シュ}あり俗^{ゾク}語^ゴは
 も二^ニ段^{ダン}なるとして一^{イチ}段^{ダン}の用^{ヨウ}言^{ゴン}あり俗^{ゾク}語^ゴの用^{ヨウ}言^{ゴン}も
 四^ヨ段^{ダン}の働^{ハたら}きとを五^コ十^{ジュ}音^{オン}の一^{イチ}段^{ダン}より四^ヨ段^{ダン}まで
 轉^ウり動^{ウご}と者^{モノ}よして即^スちア、段^{ダン}イ、段^{ダン}ウ、段^{ダン}エ、段^{ダン}の四^ヨ
 段^{ダン}なり
 上の四^ヨ段^{ダン}の言葉^{コトバ}を喉^{ノド}音^{オン}三^{サム}行^{ギョウ}を除^ケきて其^{ソノ}他^タの七^{シチ}
 行^{ギョウ}を皆^{みな}あり又^{マタ}ラ行^{ギョウ}乃^ナみよて働^{ハたら}く一^{イチ}種^{シュ}の變^{ヘン}格^{カク}
 あり即^スち有^{アリ}りと云^イふ言葉^{コトバ}よて総^{ソウ}べての言葉^{コトバ}を

學日本書紀卷之十一

ウ、段を第四轉とさるゝは、有といふ語も、一、段
まで第四轉とならざり。有の用言も
二段の働きも、兩様あり、一、段ウ、段と二段又働
と者を上二段と云ひ、工、段ウ、段又働と下二段
と云ふ
この二段の用言も八轉悉く働くと云ふは、六轉
七轉も、ウ、段よりルレを受け、八轉も、一、段と工、段
ヨヨを添ふる者と云
上二段も力行々行ハ行マ行ヤ行ラ行の六行も
下二段も十行又亘りて皆あり、但し、一、言の處は別

出せ
一、言の用言ともキシニヒミイキとウクスヌフ
とエケセネへとコとの十八音より、其一音ウ即
ち一言なり
あ、一、言一音二音三音の三種あり
一音一言も、着似煮干簾見射鑄居艘と蹴綜との
十二語なり、あ、の言葉も、共、第一轉より三轉ま
での働きも、四轉以下も、ルレヨの三音を添ふ
二音一言も、得歴寢の三語の、下二段の用言と
全と同じを、れとも、エヘネと一言より、働き又ウ

小日本書紀卷之十一

フ又と一言ヲて働とをり
三音一言を來為の兩語をり一をコキクと働
一をセシスと働共五轉までの用言をして
六轉七轉を一段と同じと八轉をコとセとよめ
ヨを添ふる者とす又六のセシスを字音に添ひ
て用言の働きのさしむる者なり脚結言の處に
記せり

○用言八轉の事

用言を八通りより變りて一轉毎に意味を異
にする者なり其異なる様を切ると詞と續く詞

と又も脚言とテニヲハと依りて時刻を現す
等なり其八轉左の如し

第一轉

ズデンバ杯の言葉を添へて物事を
消し無とすものと未來を示す者と
なり

第二轉

テキツ又杯の言葉を添へて過去を
現す者

第三轉

假も切ると詞となり又動詞も名
詞も續き又事名ともなる

第四轉

云ひ切りて結ぶ詞即ち現在なり

第五轉 ベシマシナリラシ杯ノ脚言を添へ

第六轉 て種々の働きを示す者
名詞を續く詞又種々の脚言及びテ

第七轉 ニフハム添ふる者
過去を押し量り定むる詞にしてバ

第八轉 ドの辭を添ふ
カクセヨと令する詞又頼み希ふ詞

以下を每轉マイチン五六語ゴゴづゝを舉アげて其働ソノハタラき様ヤウをシメ示セり
○第一轉ダイイチテン

立タとず 來キタらで 四段

過スぎん 攀ヨぢむ 上二段

開ヒラ々む 止トめん 下二段

見ミぬ 蹴ケず 一言

寐ネで 歷ヘじ 同二音

學 日本文典 卷之十

來コまし

為セぬ

同三音

○第二轉
四段ヨダンもア、段乃みうてえ言葉コトバをちさぬ者モノとい

書カきて

入イりたり

四段

編アたり

旧フりぬ

上二段

亂ミダれつ

定サダめき

下二段

似ニたり

居キて

一音

得エぬ

歴ヘつ

同二音

來キたり

為シたり

同三音

○第三轉

川カハを渡ワタり山ヤマを越コす

酒サケを飲ノみ肴サカナを食クラふ 四段

小日本文典 卷之十

學田栴茂典 熱之止

心ココ悔ク世ヨ耻ハづ上二段 馬ウマを馳ハせ舟フネを泛ウカふ下二段

兵ヘイを率ヒキゐ矢ヤを射イる一言 但率を引居の兩語まで
ちの一言の用言なり

功コウを歷ヘ志ココロサシを得ウ 二音一言 業ワザを為シ時トキを來ク 三音一言

カミ上カミも假カリふ切キるフ詞コトとなり下シモも正タダしく結ムスび切キるフ詞コト
なり

問トひ正タダす四段 引ヒき入イる四段

強シひ讒シコつ上二段 怕オぢ懲コる上二段

傳ツタへ弘ヒロむ下二段 飢ウゑ疲ツカる下二段

鑄イ直ナホす一言 蹴ケ落オトす一言

經ヘ廻メグる二音一言 寐ネ過スぐ二音一言

為シ習ナラふ三音一言 來キ懸カる三音一言

小月入文庫 長之七

以上動詞は續く

入日 イリヒ

待人 マチビト

行道 ユキミチ

四段

朽木 クチキ

下坂 オリサカ

落水 オチミツ

上二段

定書 サダメガキ

譽詞 ホメコトバ

尋物 タツネモノ

下二段

似顔 ニガホ

綜麻 ヘソ

干瀉 ヒカタ

一言

寐言 ネゴト

得物 エモノ

仕技 シワザ

仕を為さる

以上名詞は續く

祝 イハヒ

富 トミ

問 トヒ

笑 ワラヒ

四段

恨 ウラミ

憂 ウレヒ

悔 クイ

戀 コヒ

上二段

考 カンガヘ

教 ヨシヘ

咎 トカメ

助 タスケ

下二段

學
旧
不
可
破
壞
之
山

上着 ウハギ

物見 モノミ

潮干 シホヒ

一言 他の言葉を添へて示す

晝寐 ヒルネ

心得 ココロエ

往來 ユキ

以上名詞となる者

○第四轉

申す マフ

惜む ヲシ

死ぬ シ

四段

盡く ツ

忍ぶ シノ

辭む イナ

上二段

受く ウ

答ふ コト

始む ハジ

下二段

見る ミ

射る イ

居る キ

一言

得 ウ

歴 フ

寐 ヌ

同二音

來 ク

為 ス

同三音

○第五轉

小
大
二
月
二
六
之
上

劣ヲトろろ

云イふめり 四段

疎ウトむなり

報ムクゆべり 上二段

流ナガるめり

背ソムるとも 下二段

似ニろらん

着キるなり 一言

得ウべり

寐ヌまど

來クまじ

為スべし

○第六轉

通カヨふ路ミチ

濁ニゴる水ミヅ

生オる草クサ

落オつる瀧タキ

開ヒラくる世ヨ

教ヲシふる書フミ

學
由
本
文
典
考
之
止

簸ヒるモ粉ミ

般キるフ舟ネ

一言

寐ヌるト時キ

得ウるミ道チ

同二音

來クるヒ人ト

為スるフ技キ

同三音

以上も名詞の續く言葉

云イふオとトし

問トふオすデ

耻ハづクるナり

悔クあルたクそ

尋タぬルよリ

榮サあルたクな

干ヒるナすデ

見ミるヤ

寐ヌるタたクそ

歴フるタたクし

來クるカな

為スるナり

小
同
本
文
典
考
之
止

四十八

學
由
本
文
典
一
考
之
上

大の六轉を直^{スチ}受^ウくる辭^{テニラハ}もゾガハモニラ
ヨカ杯^ホ總^スべて其間^{ソノアミダ}は名詞^{イシ}又^イ代名詞^{イシ}のあ
る者^{モノ}と悟^{サト}るべし

○第七轉

救^{スラ}へど 照^{テラ}せど 引^ヒ々^トども

閉^トづまど 媚^コふれども 除^ゾえれども

育^{ソダ}つれど 答^{コト}ふれども 覺^{オゴ}めれども

着^キれど 居^キれど 煮^ニれども

得^ウれど 寐^ヌれど 歴^フれども

來^クれど 為^スれど

○第八轉

押^オせ 行^ユ々 賜^{タマ}へ

小
日本
文
典
一
考
之
上

學
問
本
文
典
考
之
類

下^オりよ

起^オきよ

閉^トぢよ

告^ツぐよ

改^{アラタ}めよ

與^{アタ}へよ

見^ミよ

煮^ニよ

着^キよ

得^ウよ

寐^ネよ

歴^ヘよ

來^コよ

為^セよ

以上令むる詞

四段變格の用言

變格とを上にも云へる如くありと云ふ言葉なり此言葉を第四轉の云ひ切る處よてルと云をずしてりと云ふ總へて用言をウ、段よて切るゝの一体の定りなるよ、おのありを、段を切るゝ言葉とすはれど其外の働きを常の四段よ異なるたとなしおれ即ち變格なり

八轉の例を示むこと左の如し

學
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

有らん

有らまゝ

第一轉

有りて

有りぬ

第二轉

馬あゝ車あゝ

上のアリも第三轉の假_二切_一言禁_一
下のアリも第四轉の云_二ひ切_一言葉_一

第三轉

有り付く

有り合ふ

同轉
動詞_二續_一

有家

有物

有形

同轉
名詞_二續_一

有無

おれも名詞とち_一者

同轉

山あり

家あり

人あり

第四轉

有るゝ

有るまゝ

第五轉

有る事

有る物

第六轉

有るなり

有るま_二まで_一

同轉

有れを

有れど

第七轉

有れ

第八轉

総べておのアリの言葉と第四轉を云ひ切ら
言葉より一段を用ゐる乃みりて其他も常の四段
より異なることなし
又常の四段の言葉より従ひ付きておの變格の働
きを為さることあり

開けり

隠せり

參れり

連れる路

思へる人

犯せる罪

及へれど

語れど

並へれども

右の如く四段の用言も悉く結び付きて皆此
變格の働きを為すはれと第一轉と第三轉と第
八轉ハ用ゐるおとなし
総べておのアリの結び付きし者も今現在ある

學問の要諦

より少しと過ぎ去りしことにて開ケリをヒラ
キテアリの約言なりキテを約むれむケとなり
アの字を略けり故に総べての言葉も此例も同
しと知らべし
二段と一言との言葉も此アリの結び付とこ
となしはれは鎮めり添へり杯と誤り用みらべ
あらは見但し下の形言脚言の處は同例あり合せ

俗語の用言

俗語の用言も正語と同じと八轉の働きにして
四段と一段との兩種なり四段も正俗共よ同じ
一段も一言の働きと同じとして、段と工段と
より直よルレを添へて四轉以下の働きを為
者なり
六の俗語も言葉の訛り多しして又下は受と
脚言も辭も訛言略言あり次は舉ぐる八轉の下
よおれを説くべし

四段の用言

小月大文由一巻之上

學由本義
卷之一

打ツとる

取トらん

聞キカのたふ 第一轉

ウモシの訛

シモヌの訛

ナイモナシの訛

這ハツて

知チツと

云イひとふ

第二轉

聞キイとら

呼ヨびとら

書シきたらふ

問トひませう

タモタルの略

タラモタラバの略

タイモタシの訛

ソウモセンの轉訛テシクワなるべし呼ぶなると云ふ疑の意あり
ナサイも十セの延訛エシクワ マセウもマセンの訛
又住ンど、止ンで杯ホの濁音ダクオムも清音セイオムも同し但上の鼻音を
る故ダクオム濁音セイオムとちるなり

飯メシを焚タき湯ユを沸ワのす

第三轉

云イひ聞キのす

遣ヤり込コむ

同轉
動詞、續く

待マチ人ヒト

洗アソビ髪カミ

通カヨヒ路ヂ

同轉
名詞、續く

小日本文典 卷之上

五十四

學
飲^{ノミ}食^{クモ}

出^デ入^{イリ}

讀^{ヨミ}書^{カキ}

同轉
名詞となる

進^{ス、}む

繕^{ツク}ふ

塞^{フサ}く

第四轉

咄^{ハナ}すな

行^ニくま

探^{サツ}るべし

第五轉

返^{カヘ}るらしい

ナもナカレの略
ラシイもラシキの訛

マイもマジの訛

行^ユく路^{ミチ}

扱^{アツカ}ふ物^{モノ}

扱^{ツク}む者^{サカナ}

第六轉

買^カふのよ

賣^ウるな

聞^キくもの

飲^シむけれども

死^シぬま

遣^ヤるだらう

書^カくさう

ナラもナラバの略
タラウもデアランの約訛
サウもサマの訛

並^{ナラ}へど

締^{シマ}れども

急^{イツ}げだ

第七轉

留^{トマ}れ

咄^{ハナ}せよ

歩^{アル}け

第八轉

八轉もヨを添へて云ふなり
四段變格なるアリも俗言^{ソウゲン}むりりて第四轉の
云ひ切^キる言葉^{コトバ}とちうちと正言^{セイゲン}も同し

一段の用言

一段^{イチダン}も兩種^{リウシュ}ありイ、段^{ダン}りて働^{ハタ}を上一^{カミイチダン}段と云ひ
工^ク段^{ダン}を下一^{シモイチダン}段と云ふ
大^{オホ}の一段^{イチダン}の用言^{ヨウゲン}も正語^{セイゴ}の二段^{ニダン}なれど其行^{ソウカウ}の
ウ、段^{ダン}も轉^{カウ}らば一^{イチ}言^{ゴン}一^{イチ}音^{オン}の如^{ゴト}と直^{チキ}よルレを

添^ソへて四轉^{シテン}以下^{イカ}の働^{ハタ}きをせり但^{タシ}第八轉^{ハチテン}もヨ
或^モも口^{クチ}を添^ソへて用^{モチ}ぬる

落^オちない

下^オりよう

盡^ツきん

上一段

止^トめない

諦^{アキラ}めよう

馴^ナれん

下一段

右^{ミナ}第一轉^{ダイイチテン}もしてナイとシとの訛^{ウケ}も四段^{シダン}も
同^{ドウ}じヨウもセンの訛^{ウケ}なるべし且^{カウ}四段^{シダン}りて
ウと云ふも同^{ドウ}じと一段^{イチダン}りても未^ミ來^{ライ}の言^{コト}葉^ハ
なり

學日才文典
卷之上

詫^ワびて 懲^コつたり 延^ノびたり 上二段

呆^{アキ}まゝ 固^{カタ}めたり 棄^スてまゝ 下二段

第二轉も何れも四段より同じ

世^ヨを忍^{シノ}び身^ミを悔^クひ 上二段

紙^{カミ}を揃^{ソロ}へ筆^{フデ}を並^{ナラ}べり 下二段

下^オり過^スぎる 生^イき延^ノびる 上二段

調^{シラ}べ替^カへる 枯^カれ果^ハてる 下二段

詫^{ワビ}言^{コト} 落^{オチ}人^{ウト} 朽^{クネ}木^キ 上二段

染^{ソメ}物^{モノ} 數^{カゲ}日^ヒ 跳^{ハネ}橋^{バシ} 下二段

長^{ナガ}生^{イキ} 繩^{ナハ}延^{ノビ} 恨^{ウラミ}綻^{ホコロビ} 上二段

小目太次郎
五十七

學
目
本
文
典
一
卷
之
上

水溜 ミヅタメ

日延 ヒノベ

弘詭連 ヒロメアツラツレ

下一段

右も第三轉の四種共よ四段よ同し

生える ハ

試みる ココロ

老る オ

上一段

混ぜる マ

惶てる アフ

續々 ツギツギ

下一段

右第四轉も正語の一言一音よ同し

下りる オ

耻ぢる ハ

上一段

並べらる ナラ

逃る ニ

下一段

右五轉も総へて四段よ同し

借る カ

浴びる ア

上一段

脱れる ハヅ

更なる フ

上一段

盡きる ツ

悔いる ク

上一段

小日本文典 卷之七

五十八

學
日
本
文
典
卷
之
一

耐コラへるるぞ

化バ々るたらう

下一段

右六轉も四段と同じ

起オきれど

綻ホコロびれども

上一段

眺ナカめれど

答コタへれども

下一段

右七轉も正俗共と同じ

起オきまろ

來コいよ

上一段

捨スてろ

譽ホめろ

下一段

右八轉も必ヨと口とを添へて用ゐる

小
日
本
文
典
卷
之
一

五十九

小學日本文典卷之上 終

小學日本文典卷之下

東京 大槻修二 著

言語篇 下

形狀言

形言^{ケイゲン}を物事^{モノコト}の形容^{ナリカク}と有様^{アリサマ}とを云ふ者^{モノ}よりて高^{タカシ}遠^{トホシ}樂^{ラクシ}悲^{カナシ}の類^{タガヒ}なり

大^{オホ}の言葉^{コトバ}の働^{ハタラ}きをサ行^{ギヤウ}よりてサシ^{サシ}と動^{ウゴ}き力行^{ギキョウ}も
てキク^{キク}と動^{ウゴ}く者^{モノ}よりて大^{オホ}のサ^サシ^シキク^ク四^シ音^{オン}の外^{ガハ}
も更^サ又^{マタ}働^{ハタラ}うぬ者^{モノ}なり
サ行^{ギヤウ}と力行^{ギキョウ}とよ移^{ウツ}りて言葉^{コトバ}の切^キりつと續^{ツグ}くと

の四轉あり

第一轉 其有様を云ひ切る者

第二轉 云ひ据ゑて其有様を示る者にして

事名となる

第三轉 名詞ニ付きて連體言となる者

第四轉 動詞ニ續きて連用言となる者

但六の連體連用と云ふことハ装詞の處ニ記せり

○第一轉

長し

寒し

白し

悪し

久し

美し

あめシの字をナカ、サム、シロ等の言葉ニ添へて其有様を云ひ切る者なりはれとアシ、ヒサシ、ウツクシ等を其言葉の持前ニ素ヨリシの音あれをアシ、ヒサシ、ウツクシ、と云えずして一ツのシの字を省きて用ゐるべし即ち略音の格なり其ニ轉以下をシサシキ

學日
オ
文
典
卷
之
下

シクとシの字を加へて用ゐる者なり但俗言をアシ、久シ、と云ひ又ウツクシイとも訛れり

○第二轉

近チカさ

薄ウスさ

重オモさ

嬉ウレシさ

精クバシさ

惜ヲシさ

第三轉

堅カタき石イシ

直ナホき道ミチ

新アタラシき年トシ

勇イサマシき心ココロ

俗言よを此キをイヌ訛りてカタイ石、アタラシイ年と云ふ

第四轉

早ハヤく行ユく

輕カルく上アガる

空ムナシく待マつ

宜ヨロシく頼タノむ

俗言よを此クをウヌ訛りてハヤウ、ヨロシ

小
日
本
及
由

卷
之
下

三

學
日
本
文
由
類
考
下

ウ杯と呼べり

六の形言を上よも云へる如く有の働きを結ひ
付けて四段別格の用言となる者なり
六の結ひ付く様も文字篇なる約言の格より第
四轉よりアリの動詞は結び付けどもクアの約と
心得へし

安ヤスのろず

清キヨのろぞ

怪アヤシのろぞ

浅アサのろ

闇クラのろ

嶮ケバシのろ

深フカのろ

全マツタのろ

悔クヤシのろ

短ミヂカ々れぞ

勇イサミ々れぞ

羨ウラヤミ々れぞ

貴タフトのろ

勿ナのろ

正タビシのろ

六の有の働は移り變る者を用言第一轉より六
轉まで四段別格と同じ々れとも七轉のカレな
るへきをケレと變し八轉を又本言の如くカレ
と云ひ棄て、願ひ仰きる言葉となるなり

小日本文由

卷之二

但第三轉なる四種の働きを用ゐることをなし

脚結言

脚言とを言葉續きの終りより居りて上より來る
意を結ぶ者なり
此詞を有と無とを云ひ示し又過去と現在と未
來との時刻を云ひ定むる者なり
その言葉の働き動くことを用言形言と同じは
れども又全く異なる者あり其處は云ふへし

別は無轉の脚言あり末に出せり
此詞を十種に分てり

○第一種

用言四段ノ變格なるアリの用言をれど
も第三轉を用ゐることなし
即ちセリナリザリタリケリ
メリの六言にてセナガタケメと呼ぶ

行くなほん

歸るなほん

與アタふるなり

送オクるなり

違タカふなる路ミチ

讀ヨむなる書フミ

取トるなれど

住スむなれど

右の如く用言ヨウゲンの第六轉を受くる者なりあれ
ニテアリの約ツグたる者と知るシへし

君キミなるん

花ハナなるん

是コレなり

水ミヅなり

東ヒカシなる山ヤマ

直スグなる心ココロ

人ヒトなれど

我ワレなれど

右の如く名詞を受くるをニアリの約言

云イひたるを

解トけたるん

學
卷之
七

悟^{サト}りたり

進^スみたり

死^シむたる人^{ヒト}

育^{ソダ}てたる子^コ

申^{マヲ}したれど

名^ナのりたれど

右の如く用言第二轉を受け^{ウケ}て過去^{クワコ}を云^イひ示^シす者^{モノ}即^{トキ}ちテアリの約

君^{キミ}たるを

人^{ヒト}たるで

父^チたり

子^コたり

親^{オヤ}たる道^{ミチ}

民^{タミ}たる務^{ツトメ}

神^{カミ}たれど

道^{ミチ}たれど

右の如く名詞を受^{ウケ}らるるをトアリの約

云^イをざらん

受^{ウケ}けざらん

小日本文庫 卷之七

眺ナカメせれと

紅葉モミヂせれど

右も第三轉を受くる者にてシアリの約ヤクをれ
も亦過タカ去コを示シメす者なり

云イふめり

騒サワぐめり

靡ナビくめり旗ハタ

流ナガるめり紅葉モミヂ

放ハナつめれど

語カタらふめれど

右も第五轉を受くミエアリの約ヤク言ゲンよりて現ゲン
在ザイ見ミゆる大ダイとを示シる者なり

以上のケリ、セリ、メリの三言をケラシ、セラハメ
ラス、など、第一轉は働ハタくことなし但しセラシ、
ケラズも稀シに用モチゆるおとあり
又第八轉なる仰オウする言葉コトバは用モチゆる者をザレの
一語のみ

○第二種

物事を消ケし無ナくする意イにて打消ウチケシ言葉コトバ
とも云ふへし即ちズジ又ネとマジ、マジ

ク、マジキの兩語も分る

住スまず

聞キのシ

知シらぬ人ヒト

思オモをねど

云イふまシ

答コタふシ

右も第一轉を受く但しズを云ひ切る言葉も
てジを同意ながら用み處少しく異なり又を
用言の五轉六轉も同じくネを第七轉も同じ

受ウらシまシ物モノ連レ

恨ウラむシ思オモふシ連レ

右も第五轉を受けて其働きを形言も同じ但
し其二轉のサを用みず

○第三種

過去を云ひ示し言葉をともなり即ちキシ
シカ 又ヌルヌレ ツツルツレの三語
なり

語カタりシ

助タスけシ人ヒト

試ココロみシるシ

キを切^キり、詞^{コトバ}ヲてシを上の又は同じく連^{レン}體^{タイ}言^{ゲン}なりシカを上のネは同じ

盡^ツまぬ 重^{カサ}ねぬ罪^{ツミ} 知^シりぬれど

返^{カヘ}しつ 分^ワけつ道^{ミチ} 留^{トム}めつれど

右三語も共ニ第二轉を受^ウく但^タし又ヌルを自^ジ然^{ネン}言^{ゲン}を受け^ウツツルを使^シ然^{ゼン}言^{ゲン}を受け^ウく自然^{シネン}使^シ然^{ゼン}の差^シ別^{ベツ}を文章^{ブンヤウ}篇^{ヘン}ニ云^イふへし

○第四種

未^ミ定^{テイ}を押^オし量^{リヤウ}る言^{ゴン}葉^ハにして治^チ定^{テイ}せぬ意^イを示^シせり即^スち^チン^ンメとマシ、マク、マシカとの二語なり共ニ用^{ヨウ}言^{ゲン}第一轉を受^ウく

語^{カタ}らん 聞^キのめど

あ^アの^ノン^ンを名^ナ詞^ジも付^ツきて登^トらん山^{ヤマ}、泛^{フキ}ぐん舟^{フネ}など用^{モト}ぬることあり 又^{マタ}打^ウらんず 罷^バらんむ^ム時^{トキ} 給^{タマ}らんむれむ ち^チと云^イふあ^アと^トあり 又^{マタ}ラケナテの四字を上^ウニ冠^カらせて種^{シユ}々の意^イ

學 五ノ文典 卷之十

を示せり共ニシメト同トキ働キをなせり其
意の異ナリト其言葉の下ニ出せり

思ふらん

知るらん

第五轉を受けて未來
を押し量る意

尋ねらん

留めらん

過去を押し量る意
以下共ニ二轉を受く

返してん

折りてめど

願ひてかくりたしと
云ふ意

隠れらん

絶えらん

過去を疑ひてかくり
しらんの意

あのナンヲモテニヲハの處ニ兩種あり
どそれをもメと轉らぬ言葉なり

聞のまし

見まらん

云をまらん

あのマシモト同トキ切る時と名詞ニ付
と時と兩様なりマクモ用言ニ續く詞マシカ
も第三種のシカニ同し何れも未來を示す言
葉にてンメニ同トキ意なり

○第五種
あの言葉共ニ然せしむる者と然せしむる

小日本文典 卷之十

者モとりて使然言シゼンゲン被然言ヒゼンゲンと分ワてりス総スへて用言ヨウゲンの第一轉を受ウとる者モとレセスサセサスシメシムの三種を使然言ゼンとす
レルラレラルの兩種を被然言ヒゼンとレ共ニ用言ヨウゲンの下二段ニ同シ

笑ワラをせん

押オさせ

語カタらせならず

云イなす

咲サのする花ハナ

住スますれども

咄ハナせよ

右ミえ四段ノの用言ヨウゲンを受ウとレ但タしコのスル、スレを俗言ヨクゲンもセル、セレと云フ

答コタへさせ

懲コりさせ

來キタます

着キまする衣コロモ

見ミますれども

勸スめさせ

右二段と一言との用言を受くおのスルスレも俗言ゾクゴよえセルセレとす

取トら志シめん 伺ウカミを志シめたり

率ヒキあしむ 乘ウマら志シむる馬 得ウケ志シむれど

助タスけ志シめよ

右を総スべての用言を受く又サシメ、サシムとサ文字モジを添ソふることもありなり

以上使然言

引ヒのれど 惠メグまれたり 慕シタをる

進ス、まると心ココロ 防フセのれど 返カヘられよ

右を四段の用言を受く俗言ゾクゴよえレルレレと云ふ

建タテられん 居ヲられそ 妨サマタげらる

見ミらると心ココロ 寐ネらると心ココロ 清キヨめられよ

右も二段と一言との用言を受く俗ヲモラレル
ラレルと云ふなり

以上被然言

此使然被然の兩語を互ニ受く續きて種々の言
葉遣ひとちることあり

云イもイせコるコ 懲コりコせコるコ 越コきコめコるコ

取トられトむト 行ユわれユさユすユ

右の如く結ムスび付ツきて各種カクシユの意イを示シる者モノなり

○第六種

此言葉共を敬語と云ひて人を尊敬する
時トキニ用モチぬる者モノなり

オハス マス タマフ等の言葉なり

久ヒサくヒサかヒサをヒサせヒサずヒサ 思オモひオモかオモをオモせオモんオモ

暫シバしシバかシバをシバしシバつシバるシバ 今イマ朝アサかイマをイマしイマたイマるイマ

悦ヨロコびヨロコかヨロコをヨロコさヨロコすヨロコ 聞キきキかキをキさキすキ

おろす可ベき

おろすまゾと

かろおろすトコロ處

見おろすトキ時

幼ヲサナろおろすれど

行ユきおろすれど

とろおろせよ

教ヲシへおろせよ

夫の言葉コトバを一言用言のセシスと同じき働ウツき
りて用言を第二轉を受け形言ハ四轉を受ウく

おろイまコまタさズん

答コタへマさズん

云イひコまタさズん

届トッけマさズん

存ゾンじマさズん

咄ハナしマさズん

伺ウカヒひコまタさズん

疑ウタガひコまタさズん

知シりマさズん

諭サトしマさズん

心得ませ

静りませ

右に四段の用言を多し又三音一言の用言な
るもの少しく異なる働きさすなれども自
他の違ひをわらじ

行きますせむ

動きますせん

聞きますた

覺へますて

承知します

申します

知ります事

交ります人

存しますれど

行きますれど

入りますせよ

考へませよ

右の如く上のオハセ、オハシ、オハスと同じ働
きなり総べてを第二轉より受らるの定まり

學 巨 木 文 典 卷 之 下

ちりよ又次の如く第一轉より受くることり

何々ませむ

知らませむ

右の如くアリシリより受けむしてアラシラ
より連々おとり里はれとマセバの言葉は限
多如く思ふ

知りたまへん

教へたまへん

説きたまひて

承知したまひり

歸りたまふ

宣うたまふ

交りたまふ友

乗りたまふ馬

行きたまへ

心得たまへ

進きたまへ

云ひたまへ

小日本文典 卷之下

學正典

右も四段の用言なり常ニ給ふ又玉一などの
文字を用ゐる者なり

上の脚言の外も常ニ敬語ニ用ゐる者なり

下され

下さる

右も四段の用言なるクタルの言葉も上の
被然言なるルレの添ふる者

遊むせ

遊ぶす

右も四段の用言なるアソブも上の使然言の

スセの添ふる者

又上の使然言被然言ニセ又もサセを添へて敬

語とまるとり

セサセ セサス サセシメ サセシム

セラレ セラル サセラレ サセラル

右の言葉の用ゐ様も常の下二段用言にて即ち

上の使然被然も同じ

○第七種

此言葉も上の作用言の處ニ云ひ置きた
る如くセシスの用言も字音を添ひて用

小日本文典

卷之七

す、通す、感ず、ちどの如き濁音も共よ同じ又上の被然言使然言に連るハ常の如く第一轉のセより受く又得心させ警固さす杯の如く直又受くるも何ぞ

○第八種

おの脚言、斯く何なるんと察する意のラシ、ラシキ、ラシクと斯くあれと願ふ意のタシ、タキ、タクとの兩語なり又ハシ、ハシキ、ハシクの言葉なり

男らし

女らし

嘘らしき吐

誠らしき云ふ

右も名詞より受くる者なり又云ふらしき、悪ら、杯と動詞より受くるも何ぞ

願ひた

愛で

伺ひた事

見たる思ふ

學 日本文典 卷之十

言ハ轉を為すと云ひし者なり

周旋シウセンせむ

得心トクシイせず

議論ギロンせん

拜借ハイシヤク志なき

決ケツしのぬ

本望ホンモウ志遂トダる

用心ヨウシムしたり

符合フガフして

加減カゲムしぬ

存ゾンし書

達ダツし状ヂヤウ

察サツし心ゴロ

問答モンダフす

通達ツウダツす

改正カイセイす

都合ツガフなき時トキ

往來ワウライなき道ミチ

退散タイサンなきまで

當惑タウワクなきも

満足マンゾクなきを

返濟ヘンサイせよ

総て字音ジオムを直ナチし用言ヨウゲンを用モチみたる必カナラズふの三音
一言イツゴンなりセシスの用言ヨウゲンを添ソフふる者とす又存ゾン

日本文典 卷之十

學 語 類 考 卷 之 下

右を用言の第二轉を受とる者なり

忌イマを〜

疑ウダガを〜さ

歎ナゲカを〜まヒト人

似ニツカ付〜を〜と思ヲモふ

右の言葉ルキをラシの類レキにて斯カく〜なり〜んと
少コトく疑ウタガふ意イは〜と総スベて用言の第一轉を受く
又ガハシとカマシとの脚言キタゲンは〜共トモに名詞メイジを受ウく

猥ミダリを〜し

徒イタツテを〜し〜事コト

嗚呼ヲコが〜ま〜志〜

厚アツの〜ま〜ま〜人ヒト

意見イケンが〜ま〜思シふ

右のハシ以下ハ何れイガの言葉コトバも付ツき添ソふる者モノららば自オツカら其用モチの慣ナれし言葉ありて清キ濁ダも其言葉〜に依ヨれり

○第九種

此種類シユルキも如可ゴシベシの二文字フタモジにてコトシ〜か
れとみれと同じオチき様ヤウに思オモふ意イなり又マへ

小日本文由 卷之下

學
作
六
典
卷
下

シ
ス
カ
ス
カ
ル
ン
ト
未
來
を
定
む
意
なり

行く如し

悔ゆる如き思

瀧の如く落つ

右
え
用
言
の
第
六
轉
を
受
く
又
上
よ
ガ
文
字
を
添
へ
て
寫
す
が
如
し
棄
つ
る
が
如
き
見
る
が
如
き
と
も
云
ふ
なり

來可し

聞くと可き咄

求む可と思ふ

右
え
用
言
の
第
五
轉
を
受
く

此
兩
語
を
形
狀
言
の
働
き
な
れ
ど
も
第
二
轉
を
受
く
文字
を
添
へ
て
用
み
る
お
と
な
し

○第十種

此
言
葉
を
書
狀
中
に
用
み
る
サ
ウ
ラ
フ
と
咄
し
言
葉
を
遣
ハ
ゴ
サ
ル
と
の
兩
語
を
共
に
四
段
の
用
言
を
し
て
元
を
敬
語
を
用
み
る
が
今
ハ
惟
ア
ル
と
云
ふ
言
葉
の
意
味
を
書
狀
中
に
御
坐
候
と
連
ね
て
書
く
と
常
に
多
し

左様サヤウの候サハラ

如何イカの候サウラ

小
白
本
文
書

學
年
石
之
典
考
之
下

申上候ウケ

仰せ候ウケひたる

御坐候ウケ

仕候ウケ

存ゾク候ウケふ時トキ

心得居ウケり候ウケ事コト

相考申候ウケへウケども

致候ウケへウケども

左様サマ心得候ウケへ

扣ヒカ居ウケり候ウケへ

右ミダの如ゴトくハ行ユク四段シダンの用言ヨウゴンヲて八轉ハチテンの働ハタき様サマ
共トモ又マタ同じナニ
但タダし言葉コトバの元モトをサムラフをウケどもがサウラフと
なり又マタソウロフと訛オチりて今イマを直ナジムソロとの
みれ云イハへり
又次マタのウケコサルウケモラ行ユク四段シダンの働ハタきウケマて切キれ續ツグ
きとも共トモ又マタ同じナニ

心得御坐ウケらウケぬ

覺御坐ウケらウケぬ

小
細
本
文
典
卷
之
下

學 戸 大 文 庫 卷 之 一

御坐り申さず

御坐ります

左様で御坐る

承知て御坐る事 懇意て御坐る人

覺悟て御坐れども

○無轉の脚言

無轉とて上よ記せる脚言の用言形言の如く段

を追ひ行を替へて種々の働きをなす者あらば
即ちカナとカシとの兩語にて終へての言葉の
下は戻りて夫れにて其言葉を終れり故に脚結
の言葉なるハ素よの明らなりゆれども上の言葉
共と全と異りて更動のねも別は無轉の脚
言として此に附せり

小 日本 文 庫 卷 之 一 廿五

装詞

装詞を総つての言葉は副たりて其有様と仕技とを現し示む者なりおれを二つに分てり

連體言 即ち名詞に付き連る者なり

連用言 即ち動詞に續き連る者なり

この言葉は其語の儘にて直に名詞と動詞とに連る者も甚ど少し作用言の第二轉第六轉と形狀言の第三轉第四轉と又種々の言葉は二、ナルテの辭を添へて此装詞となるおれを七種に分てり

第一 元來の装詞

第二 作用言

第三 形狀言

第四 二十ルを添ふる者

第五 テを添ふる者

第六 同語の重なる者

第七 呼び懸くる者

右七種の内は第二第三を上記せる者なれと種類を辨別せしめん為め再び其例を擧ぐ

○第一種

小日本文典

卷之下

或人 アル ヒト

初春 ハツ ハル

諸手 モロ テ

小男 コ オトコ

大童 オホ ワラハ

一言 ヒト コト

百世 モ、 ヨ

千年 チ トセ

右ニ連體言

皆同じ ミナ ヲナ

必行ふ カナラズオモヒ

又逢ふ マタ ア

且聞く カツ キ

尚甚し ナホ ハナシ

唯見る タゞ ミ

斯云ふ カク イ

然定む シカ サダ

右ニ連用言

○第二種

知人 シリ ヒト

植樹 ウエ キ

讀本 ヨミ ホン

用言の第三轉

流る水 ナガ ミヅ

歩人 アル ヒト

似る顔 ニ カホ

用言の第六轉

右連體言

打守る ウチ マモ

相謀る アヒ ハカ

差向く サシ ム

用言の第三轉

引受く ヒキ ウ

取扱ふ トリ アツカ

右連用言

六の第二種も既^{ステ}又^{サヨウ}作用言の處^{ゲン}も詳^{ツマビラ}かなり

○茅三種

高山 タカヤマ

同心 オナココロ

永き日 ナガヒ

烈き雨 ハゲアメ

右連體言

清く澄む キヨク

久くと交る ヒサマダハ

右連用言

六の種^{シユ}の言葉^{ヨト}も形状^{ケイガク}言^{ゲン}の處^{トコロ}も精^{クム}し但^タし高^{タカ}同^{ドウ}じ
の名詞^{メイジ}も連^{ツラネ}る様^{サマ}も即^{スチハ}ち装詞^{サウジ}の本^{ホン}色^{シヨク}もして茅^チ一^{イツ}
種^{シユ}も屬^{ゾク}ま^マべき者^{モノ}なれども暫^{シユ}らと類語^{ルキゴ}の縁^{エン}も因^{イン}
りて此處^{ココ}も出^{イダ}る

○茅四種

六の種^{シユ}の言葉^{ヨト}も細^{コメ}カ、平^{タビ}ラカ、華^{ハナ}ヤカ等^{トウ}も
してノとナルとを添^ツふれも連體言^{レンタイゲン}とな
りニを添^ツふる時^{トキ}も連用言^{レンヨウゲン}となる

學日本文典 卷之十

圓マドの月ツキ 安ヤスららのちなるヨ世ヨ 濃コメやのなるハナ花ハナ

右連體言

長閑ノトガと晴ハル 高タカららのに讀ヨむ 明アキららのに見ミる

右連用言

又右の言葉遣コトバツカひと同じ様オチヤウなる言葉ハナなり

更サラ 既スデ 遂ツヒ 誠マコト 妄ミダリ

徒イタツラ 懇ネシコロ 專モハラ 互タガヒ 為タメ

儘マ、 故ユエ 毎ゴト 頓トミ 疾ハク

右の言葉コトとヲ添ソフふれも連體言と
ちりニを添ソフふれも連用言とナリあと上上又同
し但し言葉の勢イキガヒの同オチじうらぬぬ因ヨりて別ベツみ
分ワてり

○第五種

おの装詞を用言の茅二轉マよりテと受ウケけ

小日本文典 卷之十 廿九

學トオクニ

て連用言とならざる者なり

始^{ハジメ}て知^シる
由^{ヨリ}て分^{ワカ}る
却^{カヘリ}て好^ヨし

総^{スベ}て同^{オナ}じ
重^{カサネ}て逢^アふ
極^{キハメ}て早^{ハヤ}し

増^{マシ}て況^{イシ}や
責^セて明^{アス}日まで
尋^{タツネ}て來^クる

右の如き類も其本語を作用言とす又用言ならぬも同じ様なる者あり

敢^{アヒ}て嘗^{カツ}て
豫^{カネ}て聽^{ヤカ}て
扱^サて

右等の言葉も上と同ぐき言葉をれども用言より來れる者よりならず

○第六種

あの種の言葉も同じ言葉の二つ重りたる者にて亦連用言とならざる者なり

適^{タマタマ}逢^アふ
倩^{ツラツラ}考^{カンガ}ふ
各^{オノオノ}守^{マモ}る

小日本成典

屢來シバシバキタる

愈堅イヨイヨカタし

抑多ソモソモオホし

旁行カタサタオコナふ

殆近ホトホトチカし

態送ワザワザオクる

交代コモコモカハる

吳頼クレクレタノ心

此外トキトコも時々處々トコトコなどの言葉コトバも二つ重カサりたる者モノの尤モトも著イチジレしき用モチる様サマなり

○第七種

去キの言葉コトバも驚オドロく時トキ又マタも歎ナゲく時トキなどトキ又マタも自オゾカら出イづる者モノもして物モノを呼ヨび懸カるとトキ如コト

ヤ 呼ヨび出ダす言葉コトバもして俗言コトバもヤア又マタもヤイと云イへり

ア、歎ナゲく時トキ驚オドロく時トキアナアラ、アレナとも同ドウし

オ、心ココロも答コタふる時トキ驚オドロく時トキなとトキりて俗言コトバもオヤ又マタもオ、オ、と重カサねても云イふことあり

ウ、心ココロもココロうなコづと時トキ又マタ危アヤウしと思オモふ時トキりて俗言コトバもコトバンといふ

右ミダの外ホカもエ、イ、などあり共トモも驚オドロく時トキ又マタ

もうなづくと時^{トキ}又呼^ヨび出^イる者^{モノ}なり又イザイデ
サアなど人を誘^{サツ}ふ時^{トキ}又用^{モチ}ある者も有り
六の第七種の装詞を連體言も連用言も何
らず総べての言葉の上^{カミ}も下^{シモ}も有りて心^{ココロ}の
様^{サマ}を装^{ヨク}ひ示^{シメ}す者^{モノ}なり

テニヲハ
六の辭^{イハラ}とも見^ミテ聞^キテ彼^{カレ}ニ此^{コレ}三筆^{サンペン}ヲ紙^{カミ}ヲ君^{キミ}ハ我^{ワレ}
ハの如^{ゴト}と総^スべての言葉の下^{シモ}も添^ツひて其言葉の
意^イを定^{サダ}むる者^{モノ}なり必^{カナラ}言葉と言葉との間^{アタ}も居^アり
上の意^イを承^{ウケ}けて下の言葉も接^ツぐ者とす故^ユも又
承接^{シヨウセツ}言^{ゲン}とも云^イふ
六のテニヲハも言葉遣^{コトバツガ}ひの最^{モト}も肝^{カン}要^{エウ}なる者^{モノ}
しておれなければ縦^{タトヒ}令^チ千萬^{マンヨウ}の言葉^{コトバ}を並^{ナラ}ぶると
も決^ケして其意^{ソノイ}を通^{ツウ}むること能^{アタ}はず
辭^{コトバ}の數^{カズ}も三十^{サムジツ}字^ジむありあり分^ワちて三^{サム}種^{シユ}とい

學日本文典 卷之十

○第一種

おの辭テニヨハも名詞メイシを承ウケけて下シハ動詞ドウシと接ツと
者モノとす故ユエに上ウヘと名詞メイシをウケぬ者モノある時トキを
車名クルマナ又カ代名カの省ハけたる者モノと知チるべし
動ウくべき者モノを舉アげ示シす又同意ドウイなるノの辭テニヨハ
あり

人が行く

心の答む

思ふの誠なり

聞との早し

花の散る

教ふるの好き

上下カミシモの間アミダを繋ツぎて相續アヒツくる者モノなり下シも亦
名詞メイシなり又おのノと同トじまがの辭テニヨハあり

人の子

君の世

鳥の聲

梅の枝

山の上

天の下

小日本文典 卷之十

學イオスル
美ニ
イ

富士の山

佐渡の島

露の命

右の外ニ動詞を名詞として受くる者あり

眠るの後

重きの上

多しの人

沖つ風天つし女などのツもあいのノガム同じ但

し古言にして今の世でも限りありて用ゐる
言葉なり

二 動く様ニ就きて其意を示す

人ニ問ふ

書ニ記す

山ニ登る

國ニ歸る

人ニ成る

敵ニ思ふ

學マナブ 朝アサ 朝アサ 聞キ 夕ユフ 死シ 涼スツ 行ユ 酒サケ 醉エ 學マナ 進ス 教ヨシ 勤ツト

朝アサ 聞キ 夕ユフ 死シ

涼スツ 行ユ 酒サケ 醉エ

學マナ 進ス 教ヨシ 勤ツト

右ミキのホカ外カミも上カミの装詞マツ第四種シの連用言ツと定むマ者モノ

ヲ 物事モノの仕分シを意イと働ハタとべき處トコロを示シま

又ヨリイの意イなりナも何ナニと下シタは接ツとも用言ヨウゴンの

字ジを寫ウツす 近チカとを廻メグる

家イヘを出イづ 妻ツマを去サる

路ミチを行ユく 門モンを閉トづ

ト 抑オサへて定サむる意イにて名詞メイジを受ウく動詞ドウジハ既スデに云イひ切キりたる言葉コトバを受ウけて下シタの意イを起オキ

す者なり又二つ並べて云ふ時用ぬるこ
とあり

英雄エイユウと稱シヨウす

神カミと祭マツる

花ハナと見ミる

露ツユと消キぬ

悟サトると知シれ

無ナしと答コタふ

斯カクと告ツぐ

然シカと定サダむ

有アりやと問トふ

我ワレをと思オモふ

月ツキと花ハナと

内ウチと外ソトと

向ムカふ方カタを指サす俗ゾクより二と同一く用ぬる

東ヒガシへ向ムく

右ミギへ長ナガし

ヨリ
物事モノゴトの兩フタツへ亘ワタり移ウツる意イの時トキを下シモマテの
言葉コトバらる者モノなり
縦タトヒ令トビをさし時トキも其意イを合フめ

り又比へで料を定むる意り限り限れる意り

東より西まで

彼より來る

素より知る

海より深し

我より外をさす

門より入れず

カラ 上のヨリと同じ

此より夫まで

外より聞え

心より出づ

今日より改む

マデ 其處に至り及ぶの意なり上り云ふ如くヨリと相向ふ者なり

家まで歸る

人まで惱す

斯まで思ふ

此まで來れ

學 日本文典 卷之十

○ 第二種

此の種の辭を總べての物事を指し示き
者なりガ、ノ、トモ、バ、ド、ドモの外に辭同志
結び付きて様々の意味を示せり
物事の差別を付くる者なり但しヲと結び
付きたる時を濁音となれども第三種のバ
とて其意味大に異なる者なり

山を青く水は緑なり 人を云ふとも我は云ふな

ハ

モ

兩以上の者を並べて指す者よりして上下兩
處に置く者なり又一處なるも其意を成る
なり

月も花も

誰もも彼もも

ゾ

多くの中より一つ取り出して指す意なり

心ぞ尊ま

然ぞ思ふ

小 日本文典 卷之十

見てぞ定む ミ サダ 是をぞ取る コレ ト

ナン ナ ナラ ズ と同じき意にて文章の中にてハ言葉の滑らまなる者なり ナホ フル 尚古くもナモとも用也

君よなん告ぐ キミ ツ 斯くなん謀る カ ハカ

コソ オホ ナカ キ 多くの中より一つの物を取り出して慥よこれぞと定むる者なり サダ モト イ モト 又願ひの意も用ぬる

人ちを見えね ヒト ミ 我ちを本人よ ワレ ホン ニン

知るちを尊れ シ タツ 能くちを來れ ヨ キタ

かろけりなきこそ カ ネガ 乞ひ願ふまじそ コ ネガ

ヤ タガ 疑ひて問ふ者なり ト けれを下も用言を置り シモ ヨウ ゲン ヲ 是にて其意の足ることあり イ タ 但し用言を第一 イ タ 四轉形言を第一轉を受く

花や咲く ハナ サ 行きや為し ユキ セ

ありや

ありや

カ

ヤ又同じ蓋指す者ありて疑ふ者なり但用言ハ第五轉形言ハ第三轉を受く

誰れもある

我ら汝ら

あるもの

あるもの

ダニ

一つの者を取り出して多くの者の證據とみる意なり

是だもあるよ

さうぬだよ

スラ

ダニよ同じ意よりて尚指す所なり

我ら知らず

サへ

物の上よ又添ふる意なり又スラと同じき意あり

死ぬとさへ云ふ

學日才才才 考之下

ノミ 一つありて二つとちを意なり

君のみ告ぐ 海のみ多し

バカリ ノミよ似て少し軽き意なり

今日ばりり悟る 夫れとばりり悟る

○第三種

上よも下よも動詞ばりりを受け接ぎ

る 辭めて上の言葉の働きよ因りて受る 處異なり又上の種の中なるが、二、三の三 つを第一種と同じきが如きも其用ひ様 甚と異れり

テ 事の終りたる者を示し用言第二轉と形言 第四轉とを受く

知りて云ふ 早くて善し

デ ズシテの約りたる者にて用言第一轉を受く 又俗語もニテの約りなれども名詞より受く

小言体文典 卷之下

間^キのぞ^カて^ナ叶^ナを^レぬ

我^{ワレ}で^レな^レし

何^{ナニ}で^レあ^レる

トモ

抑^{オス}へ^テ他^タへ^カ反^ヘつ^マ意^イを^リ用^イ言^イも^三轉^五五^轉
八^轉形^言も^一轉^三三^轉四^轉共^ニ受^ク

死^シぬ^も云^イは^じ

考^{カムガ}へ^も違^{チガ}ふ

清^{キヨ}し^も清^{キヨ}し

善^ヨま^も云^イへ^ず

惡^アし^も思^{オモ}ふ

バ

用^イ言^イ第^一轉^を受^トら^る未^ミ來^{ライ}の^イ意^イを^テ預^ヨめ^テ
然^シ成^ナら^べき^イ意^イを^シ示^シす^又第^七轉^を受^トら^る
過^ク去^コを^リ

云^イも^シ知^シらん

競^{クラ}ぶ^も分^{ワカ}る

云^イへ^も悟^{サト}る

競^{クラ}ぶ^れも^{オナ}同^ナじ

ド

トモトモも同じとして過去カクの意イなり用言ヨウゴン第七轉テンのみを受ウケく

問トへど答コタへず

起ホえれど早ハヤし

ドモ

ドドも同じ亦ナラ第七轉テンを受ウケく

見ミれども見ミえず

食クラへども味アヂ知らず

ツ

脚言キョクゲンなりツツルのツツを重カねたり者モノよして知シりつゝも知シりつ知シりつツの畧リョクと心得ココロべし

但タし繰クり返カして彼カと此コと有ア様サマを示シす者モノ即スち用言ヨウゴン第六轉テンを受ウケく

歩アユみつ見ミる

讀ヨみつ書カく

ガ

我ガ思オモふ所トコロよ違チガひて其意イの裏ウラ返カりたる意イ但タし過去カクなり用言ヨウゴン第六轉テンを受ウケく又マタ常ツネも脚言キョクゲンなりキシシカシのシシより受ウケく

尋タツねしが逢アはず

問トひけるもの答コタへず

二

上のガの意は同じく亦受くる言葉も同じ
但し現在よも過去よも亘れり

思ふを増したり

行まきしを歸らざる

たれも上のガニは同じ

考へしを行はず 思ふばりしを斯をせり

文章篇

文章も我思ふ事を書き綴る者なり即ち文字を
合せて言語となし言語を列ねて文章をなすは
れも種々の言語さへ並べ列ねれば思ひの儘を
書き顯し得べき如くなれども其並べ列ねる次
第は法式の定められも猥り又書き綴ることの
能ぬ者なり
文章を書らんよ先づ三つの言葉の區別を能
く心得かゝし文字言語の兩篇を能く會得せ
る自然は其法式を悟らばし

言葉の切續

言葉の自他

言葉の係結

右の三區別を違ねて決して文意を誤りて思ひの通ぜぬことららじ

○言葉の切續

切る言葉と動詞なる用言第四轉と形言第一轉とよりて續く言葉と上より出せる連用言連體言これなり
六の切續も形言にて著しく分ると雖も用言

よても甚と混雜し易く且四段と一音一言との用言の如きも切續共よ同じき様なり
脚言も亦切續のある者なれ用言形言も準へて其用の様を悟つし

道を行く 四段

水を流る 二段

顔も似る 一音一言

右も用言第四轉よりて云ひ切る言葉なり

行と道

四段

流る水 二段

似る顔

一言

右も用言第六轉より名詞も續く即ち連體言なり四段も切り言葉と同じくウ段より直より名詞も續けども二段より更なる文字を加へざれも名詞も續くぬ者なり一音一言も切續共なる文字を加ふるなり此事既も言語篇より其由を云へり

行道

流水

似顔

右用言第三轉にして亦名詞も續きて連體言となすはれども流る水も其有様を云ひ流ると云へも二語相結びて一の言葉の如くなりたり

行き過ぐ

流れ環る

似寄る

小... 卷之...

右も用言の第三轉ダイサムテンにして動詞ドウシと續ツグと即ち連レシ用言ヨウゲンなり

山ヤマを高タカし

心ココロも同オナし

右も形言ケイゲン第一轉ダイイチテンにして云イひ切キる言葉コトバなり

高タカき山ヤマ

同オナじココロき心ココロ

右も第三轉ダイサンテンにして即ち連體言レシタイゲンなり

高タカ山ヤマ

同オナじココロ心ココロ

右も連體言レシタイゲンなれど上カミの行道流水ユキミチカレミヅと同オナじココロと結ムスひ付ツきて一ヒトツの言葉コトバの如ゴトくなりたる者モノなり
高タカもシ文字モジを加クへドして同オナもシを加クふ此コノ事コトも既スデに形言ケイゲンの處トコロより出イせり

高タカく立タつ

同オナじココロと日イふ

右も第四轉ダイシテンにして即ち連用言レシヨウゲンなれど下シモも心動詞カネラズドウシと續ツグとべき理リなるも又マタ次の例レイの如ゴトく用モチぬること常ツネに多オホし

高く山が立つ

同じく人が曰ふ

おまゑ山が高く立つ人が同じく曰ふと云ふ
べきを名詞を中へ置きて斯くの如く用ゐる
者なりけれども其意を心山と人との名詞は續
けずして立つ曰ふの動詞は續きたる連用言
なり

○言葉の自他

言葉の自他とて此方の事を語らば此方を用
ゐるべき言葉を用ゐ彼方の事を謂ふも彼方

又使ふべき言葉を用ゐるを云ふなり

自ら然る言葉も自の言葉にて自ら然するも物

を然するも他又然するも共々他の言葉なり

六の言葉を素より動詞の用言のみよして脚言

の使然言と被然言とも総べての言葉は結び付

きて他の言葉の働きをなさむ者なり

自の四段よりして他の二段なる者なり又他の四

段よりして自の二段なる者なりおの他を必サ行四

段の働きに限り又自他共々四段なるも同ト

次は區別して其例を出せり但し小字は記せら

學日本之書 卷之十
凡皆俗言なり

自 四段

他 二段

退シリッく

退シリッく

退シリッける

伏フす

伏フす

伏フせる

立タつ

立タつ

立タてる

並ナラぶ

並ナラぶ

並ナラへる

止トッむ

止トッむ

止トッめる

入イる

入イる

入イれる

右と同オナトキ自ジ他タなれども少スしく其サマ様ヲ異ヘる者ヲあり

重カサなる

重カサぬ

重カサねる

小日本故典 卷之十

學
一
六
文
典
卷
之
一

連ツラなる

自
二段

盡ツく
盡ツまら

起オく
起オきま

落オつ
落オちま

連ツラぬ
連ツラね

他
四段

盡ツす

起オす

落オす

亡ホぶ
亡ホび

癒イゆ
癒イえ

消キゆ
消キえ

顯アラハる
顯アラハれ

崩クヅる
崩クヅれ

亡ホす

癒イす

消キす

顯アラハす

崩クヅす

小
日
本
文
典
卷
之
一

五
十

學
一
六
三
七
九

自
四段

及オヨふ

通カヨふ

澄スむ

富トむ

他
四段

及オヨボす

通カヨハす

澄スマす

富トマす

○言葉の係結

言葉の係り結びとは文章の上より上より
係りよ因りて下の言葉の結ぶ様を云ふなり
総べてあめ結びと云ふも動詞の云ひ切る言葉
りて用言を第三轉を結ぶ者とし形言を第一轉
を結び言葉とす故にあめ云ひ切る言葉りて結
ふ時を上と辭の係りなるとも素より結び言葉
となるなり

はれど上の言葉に疑ふ意をヤカの辭より係
る時とゾ、ノ、ガの如き慥に指し定むる辭ある時

小
國
本
文
典
卷
之
六

とを常の切る言葉にて結ぶす却て用言の
 第六轉と形言の第三轉と常と名詞と續く言葉
 るて結ぶ者なり
 コソの辭より係る時も更用言第七轉にて結
 ひ形言も變格なりアリの用言と結び付きて一
 變したるケレるて結ぶ者なり
 脚言も即ち此の結び最も要用なる者なりは
 れと用言と形言とと同じき働きの言葉も何れ
 も異なるおとなし但しズ、又、ネとキ、シカと
 メとマシマ、シカ、との脚言も少しく異なる所あ

り次は正語俗語を打交つて其例を出す
 用言形言の常の結びも明をれども尚一例
 づゝを出して三種の異同を示さべし

月を洩え行く 今日も雪降る

雁ぞ群れ立つ 誰のおとをふ

雨と大を聞け 今大を語れ

右も四段の用言の結びなり四轉も六轉も共

又同トくしてウ段にて切れもし續きもす
ちとも用言の處を見合すべし

花を野外尋ぬ 心は前非を悔ゆ

六の事を誰が止むる 谷川は水を流る

雲出でて月を隠れ 風誘ひ沙を満つれ

右二段の言葉も三つの結ひ殊よ能く分る

魚を鍋にて煮る 好き衣服を着る

舟ぞ洲に居る 世の人に見る

姿おそ君よ能く似れ

右一言の用言も四轉と六轉とも共ニル文字
を加へ七轉をレなり 扱ニ音三音も共ニ上の
二段は同トくフ、フル、フレ、ヌ、ヌル、ヌレ、とク、ク
ル、クレ、ス、スル、スレ、と三つの結びを分り

樂ラクはまハ苦クなり

論ロンより證據シヨウコなり

負マけるカチぞ勝カチちなる

鉤ツリ合アをぬフのエン不縁モトキの基キなる

好スきモノものジヤウス物モノのカク上手カクなれ

油ユ斷ダンをタイ大敵テキなれ

右ヨもダン四段ヘン變格カクなりアアリの用言スよスて即キヤクち脚言ゲンのセナザタケメも同オじ働ハタきナれむナリの例レイをシ記ルせり

稼カセぐオよ追付ツとビン貧乏バフなり

見ミぬ事コトぞ清キヨき

良ソヤウ薬ヤクをク口クチにニガ苦ニガ々ニガれ

右ケイもヤウ形ゲン状ゲン言ゲンなり以下イカ共トモ一イチ例レイをア舉アぐ

論語ロンゴ讀ヨミの論語ロンゴ知シらズず

盲メクラぞ蛇ヘビも惶オぢぬ

井ナの中ナカの蛙カハヅちを大海タイカイをシ知らぬ

右脚言打消言葉なり

足アシ許モトより鳥トリを立タちさ

逃ニゲるゴ一イチの手テなりし

人ヒト知シれずスを思オモひ初ハジめシの

右も過去クワコの脚言キヤクゴなり又とツとも二段も同し

以タナぎ立ヨ寄りて見ミてゆらん

君キミよ對タイして何ナニをの隠カクさん

夫ツれを詐イツクりやめ さつそ阿アめ

右を未來をミライをオシ押量ハカるコト言葉ハカなりハカ働ハカき様サマも四段シも
同し

未イマど花ハナの盛サカりよ逢アハえま

春ハル來クる大オホとを誰タレの志シらま

年トシ行ユくと大オホとをよそよ見ミま

右ホカの外ホカの脚言キョウゴンを皆ミナ此例コノレイ又ナガラ準ナラへて三ミつの結ムスびを
能ヨと辨ワカふべし

世ヨの歌ウタ讀ヨミ人の諺コトワザ又マタおの係カり結ムスびを一言ヒトコトも悟サトら
せ知シらゝむる三サム十一ジュウイチ文字モノジあり

ぞろおそれ思オモひまうやとそをりやらん

これぞいつのむきひをりやらん

ソルコソレとをソと係カるとときスルと結ムスびコソ
と係カるとときスレと結ムスぶを云イふなり又マタハリヤラ
ンも同オナじおとマてハと係カれむりと結ムスびヤと係カ
れもランと結ムスぶことなり総スべて歌ウタの結ムスびをか
のセナザタケメを多オホく用モチぬる者モノをれどハリゾ
ルコソレと大オホ丸マルの心得ココロエマて然シカらべき事コトなり

オモヒキヤトハトモ上^{カミ}ニ思^{オモ}ひまやといふ疑^{ウタガハシ}を
含^フめる言葉^{コトバ}あるときを必^{カナラシク}其^{カノ}下^{シモ}ニトハト云^イふ言
葉^ハを用^{モチ}みて上^{カミ}ニ反^{カヘ}る様^{サマ}ニ云^イひ廻^{マヒ}す者^{モノ}なり即^{スナハチ}ち
か^カと^ト何^{ナニ}らんとも思^{オモ}ひまやと云^イふ意^イなる大^{オホ}とを
悟^{サト}るへし

小學日本文典卷之下 終

明治十四年二月十八日版權免許
同 年五月刻成發行

著者

東京府平民

大槻修二

淺草區北富阪町二十五番地住

出版人

大阪府平民

柳原喜兵衛

東區北久太郎町四丁目十五番地住

出版人

同

三木美記

同區北久寶寺町四丁目四十四番地住

